大船鉾復原検討委員会前史

京　都　市

大船鉾の復興については、幕末の焼失以後、町内を主体に何度も試みられてきたところであるが、近々には平成 9 年（1997）にお囃子が復興し、平成 20 年（2008）には「大船鉾祭事振興協議会」が発足され、以後本格的な復興への歩みがスタートした。（本書「四条町大船鉾保存会の歩み」参照）

そうした町内の動きを支援する形で、京都市無形文化遺産展示室の開設準備と、その中核的な展示となる大船鉾の復原検討を進めていったことが、大船鉾復原設計の前史となる。

１．京都市無形文化遺産展示室開設の決定

平成 22 年 6 月 30 日、旧明倫幼稚園遊戯室において「京都駅前ヨドバシビルにおける、祇園祭をはじめとする京都の文化財の展示スペースの開設」について、財団法人祇園祭山鉾連合会、一般財団法人四条町大船鉾保存会、株式会社ヨドバシカメラ、京都市の 4 者による共同記者発表が行われた。

内容 : 建設中の京都ヨドバシビルの一画に、京都市無形文化遺産展示室を開設すること。展示内容は、大船鉾の復興支援を目途にした同鉾の復原展示を核に、京都祇園祭の山鉾行事の解説パネルや映像、及び市内の民俗行事などの映像展示、そして京都ヨドバシビル建設に伴い出土した遺物展示を予定。なお、展示スペースは、京都ヨドバシビルの１階北東角の約 125 ㎡で、株式会社ヨドバシカメラより京都市が無償利用の提供を受けたこと等。

共同記者会見の模様

２．京都市無形文化遺産展示室展示内容の検討（以下敬称略）

展示スペースの提供を受けた京都市が事務局となり、同展示スペースにおける展示内容の検討をはじめた。検討会は名称を、「京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示検討委員会」とし、有識者、財団法人祇園祭山鉾連合会役員、四条町大船鉾保存会、京都府文化財保護課、そして京都市文化財保護課（事務局）で構成された。なお委員長は植木行宣（元京都学園大学教授）が務めた。以下に、検討会の内容を記す。

①第１回京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示検討会

平成 22 年 10 月 20 日　於旧明倫幼稚園遊戯室

出席者：植木行宣（元京都学園大学教授）・小嵜善通（成安造形大学教授）・藤井健三（西陣織会館顧問）・吉田孝次郎（財団法人祇園祭山鉾連合会理事長）・福井芳秀（同副理事長）・岸本吉博（同副理事長）・松居米三（公益財団法人四条町大船鉾保存会理事長）・木村宣介（同理事）＊以上委員、オブザーバーとして有井広幸（京都府教育庁指導部文化財保護課）が出席する。事務局：平竹耕三（京都市文化市民局文化芸術都市推進室長）・北田栄造（同文化財保護課長）・小山田昌弘（同担当課長）・村上忠喜（同普及調査係長）・安井雅恵（同技師）・福持昌之（同技師）

検討内容と結果：事務局案である模擬鉾の展示は却下とし、展示の核は四条町大船鉾保存会の大船鉾復興とリンクさせる形で、幕末の罹災直前の大船鉾を復原展示する。ただし、完成形を見せるのではなく、最初は木組だけでも、順次復興に合わせて展示を展開していくようなかたちをとっても良いというように、柔軟に考えるという方針が示された。また、木部設計を急ぎ取りかかるために、木部ワーキンググループの組織化と、木部設計の重要な根拠である懸装品（現存遺品）の調査の要請があった。

第１回京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示検討委員会

②第２回京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示準備検討会

平成 22 年 9 月 22 日　於旧明倫幼稚園会議室

出席者：第１回目と同様。

検討内容と結果：大船鉾の復原展示は幕末罹災直前の形態で、片側懸装品、片側木組を見せる形式とする他、パネル展示案等の展示案の方向性を決定した。

３．大船鉾復原展示に向けての調査と設計

京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示検討委員会において、模擬鉾ではなく、将来復興する大船鉾そのものを展示することになったため、根拠のある木部（木組）の復原を急ぐ必要に迫られた。そのために、現存する懸装品の遺品類の調査の精度を上げるとともに、そのデータに基づ

く胴体部分の設計を進める目的で、木部ワーキンググループ（木部 WG）を組織した。

①懸装品の調査について

現存する懸装品の調査には、京都市文化財保護課の企画の下、西陣織会館顧問の藤井健三氏を中心として、龍村織物美術研究所、及び財団法人祇園祭山鉾連合会・公益財団法人四条町大船鉾保存会が参画して行われた。

○平成 21 年12 月　7 日　大船鉾装飾品のスケール調査
（於京都府京都文化博物館）
○平成 22 年 6 月 13 日　一番水引の状態調査（於龍村美術織物）
○平成 22 年 7 月 22 日　装飾品の詳細調査：金具の痕跡等の
使用痕、褪色度合い、仕立て直し痕等。
（於旧明倫幼稚園遊戯室）
○平成 22 年11 月　5 日　遺品類のうち、天水引と雨用前掛けの調査
（於京都府立総合資料館）

装飾品の調査（平成 21 年 12 月 7 日
於京都府京都文化博物館）

②木部 WG について

「京都ヨドバシビル内文化財展示室（仮称）展示検討会」の方針に従い、同展示にかかる大船鉾の復原設計（胴組部分）を目的として、「木部 WG」を組織し、平成 22 年 11 月から翌 23 年 2 月まで 4 回開催した。

木部 WG の構成は、以下の通りである。
三上晧造（学校法人京都建築学園京都建築専門学校長）・藤井健三（西陣織会館顧問）・小島冨佐江（特定非営利活動法人京町家再生研究会理事・事務局長）・末川協（特定非営利活動法人京町家再生研究会幹事）・㈱竹田工務店・財団法人祇園祭山鉾連合会・公益財団法人四条町大船鉾保存会。オブザーバーとして京都青年会議所と京都府文化財保護課。事務局は京都市文化財保護課。

木部 WG（平成 23 年 2 月 2 日　於竹田工務店）
雨用水引と前懸をウレタンフォームで作成した型につける

○第１回　平成 22 年 11 月 19 日　午後２時～午後４時　於旧明倫幼稚園会議室

○第２回　平成 22 年 12 月 20 日　午後２時～午後４時　於旧明倫幼稚園会議室

○第３回　平成 23 年 ２月　２日　午後２時～午後４時　於竹田工務店

○第４回　平成 23 年 ２月 28 日　午後２時～午後４時　於竹田工務店

４．「京都祇園祭大船鉾復興展示―京都市無形文化遺産展示室―」の開設

平成 23 年 10 月 23 日（日）午後２時 30 分より、記念式典及び内覧会を、同展示室（京都市下京区烏丸通七条下る東塩小路町 590－2　京都ヨドバシビル１階北東角）にて開催。

京都市無形文化遺産展示室内での鉾の組み立て（平成 23 年 10 月 13 日）

京都祇園祭大船鉾復興展示―京都市無形文化遺産展示室の
開設記念式典（平成 23 年 10 月 23 日）

第１回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成23年6月22日（火）午後1時～3時
会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）
出 席 者：植木行宣委員長、小嵜善通委員、久保智康委員、末川協委員、林駒夫委員、藤井健三委員、三上皓造委員、水野耕嗣委員（以上委員、五十音順に記載、敬称略）
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都府商工労働観光部染織・工芸課
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
（以上オブザーバー）
財団法人祇園祭山鉾連合会
公益財団法人四条町大船鉾保存会　　（以上事務局）
《議　事　録》
事務局　（挨拶、委員紹介、略）委員長は互選で選出したいが、どなたか推薦いただきたい。
林委員　植木委員にお願いしたい。（委員全員承認。）

植木委員長

植木委員長　大船鉾のワーキンググループの成果を引き継いで、設計図を作っていきたい。5回では収まらないこともあろうかと思うが、これを目途に原案を練り上げたい。また、大船鉾保存会が山鉾連合会の会員になったと聞いた。これは非常に重要で、単に大船鉾の復原ということだけであれば、ある程度自由であるが、山鉾連合会が保持団体になっている指定文化財としての祇園祭山鉾行事に加わっていくためには、文化財としての根拠がないといけない。連合会の指導や本委員会の議事を元に、文化財として、平成の大船鉾の復原を目指すということで、そこを大船鉾保存会にも承知しておいてもらいたい。また、この文化財としての復原という大枠のもとで、議論を行いたい。では、議事に入る前に経過説明をお願いしたい。まず、本体について京都市文化財保護課から始めてもらいたい。
京都市　京都駅前にオープン予定のヨドバシカメラビルの北東角に、文化財展示室を京都市に無償貸借して下さるという話があり、復興への動きを始められた大船鉾の復興支援になるような展示を核として、祇園祭の展示をするということで、昨年6月に記者発表を行った。大船鉾の復原展示をするということで、展示検討委員会を立ち上げて議論いただき、展示にはイミテーションではなく、復興する実物を展示すること、完成形ではなく、復興の過程を展示することが決定した。これを受けて、まず鉾の船体を設計すべく、大船鉾設計図作成ワーキンググループを立ち上げ、ほとんど改変されていない懸装品を元に寸法を割り出し、末川委員に設計図を作成いただいた。設計図については末川委員からご説明いただく。
末川委員　ワーキンググループが終了した時点で、鉾全体の寸法については確認していただき、船体の原寸模型を作製した。その後、5月の連休までの間に、船鉾を参考に部材の設計を行い、全部で50ピース程の部材を特定した。全体の原寸大模型ができており、今月半ばから材料の発注にかかり、入ったものから加工に入っている。最後のワーキンググループで野高欄の反りについて三上委員からのご指摘があったので、それを反映させたのが本日提示した図面である。船鉾の構造を元に、現存幕の寸法を参考に割り出している。

京都市　船鉾と比較すると、流線形で、長さは若干長く、幅はほぼ同じである。展示の関係で、本体部分は着手している。また、現存するのは懸装品のみなので、そこからできるだけ情報を得たいが、明治期に会所飾りとして改変されているため、指定文化財ではあるが、現状に戻すということを前提に、龍村美術織物で裏地をめくる解体調査を行った。今回、裏地をほどいたのは、水引は舳先の右舷左舷を合わせた部分、左舷中央部、左舷艫部、右舷艫部の4点、艫屋形下水引の3点の計7点である。
植木委員長　幕の設計図はできているのか。展示につける予定であろうが、どうするのか。
京都市　大船鉾の復原と展示はまた別次元の問題で、理想的な設計図を作成するのが重要であると考えている。
植木委員長　展示の日程に縛られず、復原案を考えればよいということだ。水引について、竿袋がある一方で、釘穴もあるということで、紐でつったのか、竿を入れたのか、そのあたりをきちんとつめてもらいたい。幕をどう装着するかは、全体にも関わってくる。
久保委員　現存品を修理して使うという前提があるのか。
京都市　それは保存会の判断になるだろうが、現存品を使うというより、理想的な復原設計図を考えていただきたい。
久保委員　部分的にでも古いものを使うというのと、すべて新造するというのでは違ってくる。現存品を使うのであれば、修理をどうするのかという、いつも連合会と話し合っているが、非常に根本的な問題と係る。その部分ははっきりとしてもらいたい。2点目として、復原にあたって国庫補助は出るのか。
京都市　まず2点目についてであるが、展示に関連して設計図は市で作成したが、本体は京都青年会議所の寄付と保存会で作成してい

る。御神体人形は、京都府の補助で作成ということになる。今後は、補助金なども視野に入れていくことになろうが、現段階では、すべて保存会の資金で賄われる予定である。

久保委員　実施設計図までいるのか、基本設計図でいいのか。

京都市　基本設計図に近いもので良いかと思う。1年間という期限もあり、デザインをお考えいただくということになろうかと思う。

久保委員　デザインといっても、鍛造か鋳造かで変わってくる。材料や仕様を想定しなければ、デザインもできない。そのあたりをつめてもらわないと目指すところがわからない。

植木委員長　大事な指摘である。復原の設計図から実施まで進めるところまで目指すのが本委員会の役割であろう。

京都市　久保委員の1点目の質問については、保存会と協議して説明したい。

大船鉾保存会　保存会としては、使えるものはできるだけ使いたいということで決定している。

植木委員長　保存会から現幕をできるだけ使いたいという意見が出されたが、基本的な案として聞き、今それを決定するというのではなく、今後の議論になっていくかと思う。保存会も、山鉾巡行全体に関わる問題として考えてもらいたい。では、御神体人形について京都府から報告してもらいたい。

京都府　御神体人形については林委員をお迎えして、保存会、府の染織工芸課、府・市文化財保護課と進めてきた。大船鉾の人形は4体で、神功皇后については市の指定文化財になっており、今回使用するということになっている。復原の基本となる資料は『増補祇園御霊会細記』で、これに従い、大きさは神功皇后を参考にする。今年度の事業としては、人形の装束の制作に着手する予定である。上着は狩衣を基本とし、袴類は大口を基本とする。狩衣は単衣で夏向きの着物がよかろうということになっている。色や文様については今後決定する。神功皇后については小直衣が残っており、これを使うかどうかも含めて検討する。

植木委員長　これは23年度事業であるので、今年度中に済まさねばならない。これから議事に入るわけであるが、具体的な検討原案というものが出来ていない。船体部分は出来ているが、絵画資料でいうと個人蔵の大船鉾図（以下、「個人蔵本」と略す）などを参考にして屋形部分を設計していかなければならない。

京都市　個人蔵本は主屋と前後の付属屋の取り付きがおかしい。絵描きの誤りであろう。天水引の使用痕や絵画、文献を参考に屋根の復原をすることになろうかと思う。人形と屋根の位置なども関連してくる。

植木委員長　装飾品的なものは本体が決まってからせざるを得ないが、三上委員から屋形について意見があれば述べてもらいたい。

三上委員　個人蔵本は絵描きの理想的な形として描かれており、通常はあり得ない。これをそのまま復原するわけにはいかないので、修正を加える必要がある。

植木委員長　懸装品の方からはいかがか。

藤井委員　天水引は四本柱にかかっていたというのみで、個人蔵本のように掛けられていたかどうかはわからない。片側に龍が2匹向かい合っているが、これでは他の水引があったという想定になる。現存遺品との位置づけもあって、早急に解答は出せない。

小嵜委員

小嵜委員　天水引は使用痕でいくと、長さが2m70cmほどあって、前の唐破風まで含んでいると思うがいかがか。今の船鉾と較べると、この寸法でほぼいっぱいになるのではないか。幕末期の絵を見て言えるのは、進行方向に棟が通っており、今の船鉾とは90度異なる。それと四方に唐破風があるところは一致している。絵画からおさえられるのはそのあたりかと思う。

大船鉾保存会　楳嶺は、数えで19歳まで四条町に住んでいた人で、金幣と龍頭の図を描いている。ほぼ正確に描いているのではないかと思う。

植木委員長　楳嶺の図も参考にすべきだろう。人形4体と囃子方が乗るので、あまりせせこましいと困る。『増補祇園御霊会細記』では、「屋根二重屋根、唐破風銅瓦、屋形組天井柱六本」と記されており、今の船鉾とさほど齟齬がないのであろうが、「二重屋根」とはどういうことであろうか。

三上委員　「二重屋根」ということだけでは判断しかねるが、絵画資料と合わせると二重になっていることかと思う。

植木委員長　楳嶺の方が実際に近い気がするが、水野委員いかがか。

水野委員　個人蔵本は詳細に描いてあるが、切妻の三方に軒唐破風がついており、建築的に考えると、真ん中が切妻で前後に唐破風を取り付けるという、後で合成したような形式である。楳嶺の方は一体化されている。他の資料とも合わせると、切妻に、軒唐破風がついているのが正しいのではないかと思う。但し前方には大きい唐破風がついて、人形を飾るために一段前に出ているのがいいのではないか。前は唐破風と屋根がついて二重になっていて、後ろは切妻の三方に唐破風がついているという姿を建築として想像していた。

植木委員長　末川委員から、船体とからめてご意見があればうかがいたい。

末川委員　天水引の摩耗痕を根拠に、柱の外一外で2800×1600という現状の数字を算出している。その中で、柱6本というのも間違いないと考えている。屋根が二段という点については、現船鉾を見ると、上下二段で桁を組んでいる。低い桁で前の方の唐破風を出して、後ろの高い方の持ち出しで後ろの破風を支えている。桁二段を二重屋根としているのかと考える。柱は6本で四方に破風が出せるという構造を提案させていただくかと考えていた。

三上委員　表現についての補足であるが、屋根の隅から一続きで盛

り上がった唐破風の場合は唐破風造りといい、中央だけ一段上がって軒先が別になっているのを軒唐破風という。

植木委員長　中にどれだけの人間が乗って、人形がどう乗るのか、今の意見を参考に屋形の制作を進めていけばと思うのだが、船鉾と大きく異ならないのではないだろうか。細部の意匠についてはどうだろうか。金具は一部残っているのか。

京都市　残っていない。

植木委員長　装飾的な飾り金具は、屋形部分にはないということか。

京都市　そのあたりを絵画資料や久保委員からご教示いただければと思う。木彫と飾り金具については全く資料がない。

植木委員長　林委員から人形についての意見があればうかがいたい。

林委員　どういう風に配置されていたのか、ということも気になるが、神功皇后が残っているので、それに合わせていけばよいと考えている。装束は能衣装が基本にあるが、京都府の事業の場合、色をまず決めなければならないのではないかと思う。

植木委員長　人形はすべて立っているのか。

京都市　立っている。

小嵜委員　屋形については『増補祇園御霊会細記』の船鉾の記述も参考にすべきだろう。

事務局　来月の祭で船鉾の見学会を考えている。そこで比較できれば良いと思う。

植木委員長　完成した時に、何を元にしてできたのかという根拠を示せないと困る。次回はたたき台になるデータをしぼって出してもらいたい。

事務局　船鉾の見学会については日時を調整しておってお知らせする。　（以上）

第 2 回大船鉾復原検討委員会は現地調査

開催日時：平成 23 年 7 月 11 日（月）、14 日（木）、16 日（土）

会　　場：船鉾（京都市下京区船鉾町）

第 3 回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成 23 年 9 月 28 日（水）午後 1 時～3 時

会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）

出 席 者：植木行宣委員長、小嵜善通委員、末川協委員、林駒夫委員、藤井健三委員、三上皓造委員

（以上委員、五十音順に記載、敬称略）

京都府教育庁指導部文化財保護課

京都府商工労働観光部染織・工芸課

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

（以上オブザーバー）

財団法人祇園祭山鉾連合会

公益財団法人四条町大船鉾保存会　（以上、事務局）

《議　事　録》

植木委員長　大船鉾の文化財としての復原に関して、前回に引き続き、議論をしたい。まず京都市文化財保護課から経過報告をお願いしたい。

京都市　前回の委員会のあと、現在ある船鉾の実見や実測を行っていただいたし、失われた昔の大船鉾の画像資料の検討もしていただいた。その成果や意見を持ち寄って、基本設計にどう生かすかということが今回の委員会の目的だ。ご欠席の水野委員からのご意見も参考にしていただきながら、本日の討議資料の作成を、末川委員にお願いして、基本設計の下案を作って来ていただいた。まず末川委員から、それを聞かせていただいてはどうか。

植木委員長　きょうは、懸装品の問題、人形の問題もあるが、基本設計が最大の問題であり、その原案を末川委員が作ってくださっているとのことなので、そのご説明をお願いし、具体的な意見交換をしたい。

末川委員　前回絵画資料をもとにみなさんから意見がだされたが、どの資料をもとに意見を言っておられるのかわかりづらかったので、大屋根の形、前下屋の屋根、後下屋の屋根の形、艫の屋形の 4 つに注目し、それを製作年代順に一覧表にまとめ、どれをもとにどう判断し、基本設計の参考にしたか、図をご覧に入れながら、ご説明申し上げたい。1 番目は「祇園祭礼真図」、これは本体が唐破風屋根で、側に唐破風軒が付いていて、その軒屋根どうしがぶつかっているような形。そのほかの特徴としては、鬼板部分に烏帽子が付いている、前の下屋（げや）のほうが唐破風屋根になっている。後ろには下屋はない。艫の屋形の手摺には上も下も擬宝珠がついている。さらに花頭窓（かとうまど）の下に腰壁が付いている。これは他の資料と食い違う部分である。2 番目の「祇園祭礼図屏風」は、大屋根が切妻になっていて、唐破風軒が側についている。切妻屋根の上のほうに目地が 2 本ついていて、これは屋根の分割を示しているものと思われる。前の下屋の屋根も後ろの下屋の屋根も唐破風屋根になっている。艫の下部の手摺は角葛（つのかづら）、上部の手摺は擬宝珠である。この資料は他と比べて最も詳細に描かれている。3 番目は『祇園会御祭礼山鉾之由来』、版画用にデフォルメされている。唐破風屋根で、側に唐破風軒が付いていて、艫の手摺は上も

下も擬宝珠である。迫り出しの斗栱（ときょう）は省略されている。4番目の「祇園祭礼絵巻」は、人形と御幣に焦点があっている図で、省略が多い。構造の参考にはあまりならない。5番目「京都祇園祭礼鉾之図」も版画用にデフォルメされている。切妻屋根で、側の唐破風も無く、鬼板に烏帽子は描かれているが、前の下屋も省略されている。6・7 番目は「大船鉾図」で、これは前から描かれている数少ないもので、大屋根の本体は唐破風屋根で、側の唐破風軒は描かれていない。鬼板は詳細に描かれている。前の下屋は唐破風屋根で、隅の反りが大きい。後ろの屋根は描かれていない。艫の屋形の手摺は下が角葛で上は不明、おもしろいことに艫の屋形を 90 度曲げて描かれている。6 と 7 で違うのは幟に付いている文様が違い、あとは同じである。8番目『増補華洛細見図会東山之部初編』では大屋根は切妻屋根、側の唐破風軒はついている。鬼板に烏帽子があり、前の下屋の屋根は唐破風屋根、後ろは不明、艫の屋形は、下部の手摺が擬宝珠で少し外側にころび（傾き）がついている。上の手摺も擬宝珠である。花頭窓の下に腰壁が付いている。迫り出しの斗栱の下に幕板が有り、それはこの資料だけである。3番の版画に詳細を追加したものと思われる。9番目の「八坂神社大船鉾図・大船鉾図」は、入母屋で、屋根の形としては切妻と唐破風の間をねらった反り温り（てりむくり）となっている。特徴的なところは、入母屋の妻面が木連格子（きづれごうし）になっている。前の下屋の屋根は唐破風屋根で、後の下屋の屋根は唐破風軒となっている。艫の屋形の手摺は角葛、上部の手摺は擬宝珠で、斗栱の数が少ない。10番目も同じ作者の同じ作品であるが、人の寸法を小さく数多く描いて、鉾を大きく見せている。11 番目の「大船鉾図」は、大屋根本体は入母屋で、側唐破風軒がついている。前の下屋の唐破風屋根が、ずれて入母屋屋根に取り合うような変わった形になっている。後の下屋は不明であるが、大屋根形状から唐破風軒と思われる。艫の屋形は下部の手摺が角葛ですこし前にころびが見られる、上部の手摺は擬宝珠。斗栱が小さめに書かれている。参考までに、先日お祭のときに委員の皆様に見ていただいた現存の船鉾を同様に表に入れると、本体大屋根は入母屋、側唐破風は無し、木連格子、前下屋は唐破風屋根、後の下屋は唐破風軒である。艫の屋形の下部の手摺は擬宝珠、上部の手摺は角葛でいずれも前にころびがある。屋形本体が3方向にころびがある。以上を比較検討すると、大屋根の形状については、切妻、唐破風。入母屋の3タイプがでてくるが、入母屋は、大船鉾焼失のあとに、船鉾と過去の大船鉾画像を参考に描かれたものと推測される。そのため絵師の迷いが、切妻と唐破風の折衷のようなものを描かせることになったのではないか。大船鉾焼失前の8点絵画資料のなかでは、2番の「祇園祭礼図屏風」が、背景の建物や人物などの写実が詳細でいちばん信頼できるような気がする。それをもとに、大屋根は切妻で、側に唐破風軒を付ける、前の下屋は唐破風屋根、後の下屋も唐破風屋根ということで、基本的には絵画資料2を参考に、また船鉾さんの実際のおさまりを参考にしながら、基本設計をすることにした。基本設計の案はご覧の通りである。

植木委員長　それではこれを叩き台に議論をすることにしたい。とりあえず構造にも関係する外観、見た目の姿から議論したい。三上委員、ご専門の立場からいかがか。

三上委員　私は今の報告を聞くまでは、画像資料としては 11 番が一番詳しいし、良いかな、と思っていたが、末川委員の説明で、よくわかった。しかし、上の切妻屋根と下の唐破風の幅の関係はどうなのかについてはもう少し検討する必要があるし、軒唐破風は屋根から 1 段上がるのが普通なので、これも検討の余地があると思う。また、艫の屋形の跳ね勾欄の先端は、一番上の切り口の角度に二番目、三番目も合わせて揃えるのが社寺建築では普通だ。

植木委員長　艫の屋形のハネ勾欄の先端については、三上委員のご指摘通りに直していただくということで、外観の屋根の寸法等については、少し検討することにして、基本的には原案をもとに検討していくということでご了解を得られたということで宜しいか。

一同　異議なし。

植木委員長　これは普通の建築と違って組み立て式なので、どこでどう分けるかということと雨水の問題についても、次回までに検討いただきたい。それから、構造と直接関係する幕との関係では、藤井委員、原案に問題はないだろうか。

藤井委員　大きな齟齬はないと思う。幕の調査で、鉤穴をふさぐために縮めてあることがわかった。元に戻すと 10 センチほど伸びる可能性があるが、今後、調整はできると思う。

植木委員長　それは実施設計の段階でも摺りあわせていただくことにして、次に人形の配置との関係で、林委員いかがか。

林委員　私の立場としては、どこにどういう風に配置していただいてもいいので、基本設計や構造の議論の段階で、私の意見を聞いていただく必要はない。船鉾と違えて独自性を出す必要もないと思う。

京都市　お祭りのときの調査では、船鉾の場合は、先頭が磯良・住吉・神功皇后・鹿島の順に一直線に並んでいる。写真を撮っているので、お送りする。

植木委員長　人形の立位置は、それを床板に止める位置と、下からあがるハッチの部分との関係でもあるので、今後調整をお願いする。

三上委員

三上委員　少し参考までに、北野天満宮の中門（三光門）の写真をお見せする。入母屋づくりに、大きな千鳥破風がついて複雑なつくりになっている。雨のあとの写真で、雨の流れかたもよくわかる。

植木委員長　きょうは、基本設計の原案を報告していただいて、それをもとに、主に屋根の形をめぐって色々ご意見をいただいた。残されている細部の問題は、今後詰めることにして、きょうの議論を

参考に、基本設計を詰めていっていただきたい。

事務局　鉾は揺れながら動くものなので、きしみながら衝撃を吸収する、非常に微妙な工夫が構造に施されている。既存の鉾を参考に、その工夫をお願いしたい。

植木委員長　それでは、本日の議論はこれぐらいにして、進行を事務局にお返ししたい。

京都市　文化庁の今年度補助事業の成果物として、この基本設計図を提出するということで、ご了解いただきたい。現実には、次の祭のときに船鉾をまた見て、再度基本設計をやりなおすことになると思うが、連続して実施設計に進めるかどうかは、大船鉾保存会主導でお考えいただくということになる。

事務局　連合会としては、次年度も文化庁に申請を出せるのであれば出したい。そして、この委員会と末川委員に最後の段階まで、お世話になりたいと考えている。

事務局　次回については日時を調整しお知らせする。　（以上）

第 4 回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成 24 年 2 月 3 日（金）午後 1 時～3 時
会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）
出 席 者： 植木行宣委員長、末川協委員、藤井健三委員、
三上皓造委員、水野耕嗣委員
（以上委員、五十音順に記載、敬称略）
京都文化博物館祇園祭展示担当者
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
（以上オブザーバー）
財団法人祇園祭山鉾連合会
公益財団法人四条町大船鉾保存会　（以上事務局）

《議　事　録》

①経過報告

事務局　まず末川委員より経過報告をお願いしたい。

末川委員　9 月 28 日の第 3 回検討委員会では、大船鉾の屋形のアウトラインの考え方（叩き台）に対して各委員から指摘を受け、また 10 月 23 日にヨドバシカメラでお披露目があったときにも委員や町内の方々から意見をいただいたので、併せてご報告する。それを踏まえて、今後私がとりかかる作業上検討しなければならない課題等も報告する。ご確認いただきたい。屋形部分に関して、その鍵となる水引幕と化粧柱はどこまで整合性がとれるかという質問だが、6 本の化粧柱のうち、前の 4 本はできあがっている構造と一体になっているので原則として動かさず、後ろの 2 本は前後に動かす可能性がある。高欄の張出しと大屋根、前屋根の軒の出が足りないのではないかという指摘があったが、両方の絵を描いて検討したい。屋根デザインの基本は概ね了解だが、大屋根が主で前後の下屋が従う形がよいということ、また唐破風軒の前傾には気をつけるようにということ、大屋根だけでなく、前下屋の唐破風屋根の軒の出をもっと大きくしたほうがよいという指摘もいただいた。側唐破風は一般の軒と縁を切るようにという指示があった。屋根の仕上げ材は赤がねとあるところを、銅板にするか漆にするか検討が必要という指摘があった。仕上げ材、下地材を含め屋根分割にはルールがあるので、デザインとは分けて技術的に検討するようにという宿題もいただいた。艫屋形については、跳ね高欄の端部の角度を直線で揃えることという指摘をいただいた。手摺が小さすぎるのではないかという指摘があったが、実は、実測で描いた上の屋根高欄をそのままもってきていたのを指摘いただいたわけで、今後、船本体の化粧高欄を描くときには正確を期さなければならない。床部分について、床面で人形を固定する支点は、一体につき 2 ヶ所必要という宿題をいただいた。次に、ヨドバシカメラにおけるお披露目の際の指摘事項としては、屋形の軸組構造をしっかり検討することという指摘をいただいた。懸魚のデザイン、手摺のデザインについて参考にするようにと写真資料、文献資料をいただいた。御幣の角度はもう少し起き上がっている方がスペースをとれるのではないかという指摘をいただいた。これらの内容を受けて検討し、それぞれ次回委員会までに作図を提出したい。文化財保護課からは、今残っている幕類や御幣等を含めたすべてのものを図面に落とす作業があると聞いているが、私の技術ではできない部分があるため、デザイナーの応援をいただくという話になっている。また、前回は床面レベルの図面がなかったので、次回化粧高欄を描くときには囃子方の人数や人形の位置、御幣の支持の仕方等の要素を載せた叩き台を用意したい。技術的には、指摘いただいた屋根の分割方法・固定方法、艫屋形の軸組、化粧高欄の分割・固定・開閉等の問題や、巡行まで町内にいる間は囃子方の乗り降りのため、現状の船鉾でも手摺りの一部が開いているので、そういった仕組みも反映させなければならない。また、現実には、町内の予算の集まりに応じて製作されるので、各部で経費を概算しておく必要がある。製作実施に向けては、当面の巡行に必要な部位と、今後資金が貯まったときに追加する化粧といった仕分けが必要になるだろう。前回会議以降は、10 月 10 日大津祭り神功皇后山の資料を受け取り、12 月 27 日立命館大学の矢野桂司先生より部材のデータを受け取った。今後の見通しとして、3 月に船鉾の収蔵庫の改修が終わった時点で船鉾が運び込まれるが、その唯一の機会を狙って、主な化粧材の実測調査をしようと考えている。そして、各々の検討課題を反映させて、3 月には全体デザインの成果を出すつもりである。7 月の祭りの際は、特に化粧材（前回の祭りでは構造が中心だった）について、組立の順序、仕口の状況等を把握し、実施図面を描くため各部材数に至るまで情報を得たい。

植木委員長　末川委員から、全体の基本的な設計を踏まえ、その後調整された問題について細かく説明いただいた。前回充分に議論されたところではあるが、さらに質問あるいは確認事項があればご発言ありたい。ないようなので、次の報告に移りたい。

②調査報告

(1) 現存懸装品に関して

事務局　それでは調査報告として、懸装幕類について藤井委員に説

明をお願いする。

藤井委員　昨年の7月22日、懸装幕類（前掛幕、見送幕、天水引幕、下水引幕等）にどのような改変がしてあるかを詳細に調査した。元の形とほぼ変わらないところもあれば、相当改変されているものもある。全体的に、会所の懸装用になんらかの改変がなされているのが現状だ。しかし、ほどいて中まで詳細にみることはできないため、外観からの調査であったことを了解いただきたい。前掛幕については、再仕立ての際にわずかながら縫い目の位置がずれており、外して付け直したことが分かるが、ただし、ほぼ原寸に近い形で縫い直されている。上の部分の、窠紋と巴紋は全く違うものが縫合されている。見送幕については、縫い直された跡がみられるが、ほぼ元と同じ形と大きさである。緋羅紗の大きさはわからないが、幕自体はほぼ同じような種類で縫い直されている。裏面も相当痛んでいるので、恐らく一度裏返して両面とも使っている。今回の仕立て直しではなく、相当、以前のものではないか。主屋形の天水引幕は前面の中央で付き合わせ、後ろも後ろ面の中央で付き合わせるという掛け方をしていたようである。一枚につき文様の龍と瑞雲の間に擦れ跡が2ヵ所あり、柱に擦れた跡と思われる。真ん中にも跡があるが、これは柱の痕跡ではなく、恐らく幕を吊り上げた畳み皺であろう。鞐（こはぜ）と鞐受が付いているが、仕立て直しの際に位置が付け替えられた。両端が少し中側に縫合されており、元はもう少し長さがあったのだろう。それを考慮しても、幕2枚を繋ぐと周囲の長さとして892.9㎜という数字になる。これが4本の柱を渡して一周回して掛けてあったと思われる。船鉾の柱は6本なので、大船鉾も6本かもしれないが、擦れ跡がなく辻褄が合わない。下水引幕について、舳先水引幕は、現在は真ん中が縫ってあるが、裏地を使い回して仕立てたと思われる。前、中、後ろの幕が左右あり、舳先正面の部分を入れて7枚で構成されている。それぞれをつなぎ合わせるとほぼ模様は合うが、それでも10㎝、多いところは20数㎝、図柄が合わないところがあり、また元の布を縫い込んである部分も見られるので、かなり変形しているとみられる。全体は船の形に合わせ、湾曲を描いて3枚綴りで仕上がっていたものを、会所の懸装用として長方形になるように作り直されたようだ。上を詰めて切るか、中に折り込んであると思われ、ほどくと1本に繋がる形に戻るのではないか。舳先の正面部の幕には4カ所、角錺り金具の跡がある。4個の金具も遺されており、ここに用いられていたと思われる。現在は、二番水引幕はついていない。町内には額に遺る二番水引があり、寸法が少し合わないが、これが正面の下に使われていたものではないかと思われる。艫櫓の下水引幕は、左右と後方の3枚が遺されている。角金具の跡が一方にはあるが、もう一方にはないため、仕立て直す際に縫い込み、もしくは切断した可能性がある。ほどけば、当時使われていた幕の寸法が分かるのではないかと思う。左右の幕のそれぞれ外側と、後方の幕の両端は縫い込みの跡がある。大きな寸法の変更はないが、2～5㎝の改変がみられる。町内で現在「敷物」として遺されている、緋羅紗と萌葱羅紗を繋ぎ合わせた縦縞の布は、胴懸幕ではないかと思われる。船の大きさからみて幕としてはかなり小さいが、切るか、もしくは縫い込んで6枚の敷物として仕立て直されたのではないか。常懸の下水引幕は、船の本体を覆う長い一枚物で、汚れ等の形跡からみても、元の幕の形を遺していると思われる。

植木委員長　ここで問題になるのは、船体部を含めて既に設計図面を描いたので、幕のほうで調整が必要だということか。

藤井委員　天水引幕が問題になる。設計図では周長を8m80㎝で設計している。幕は8m93㎜だから、末川先生の詳細調査より13㎝長いことになる。後ろの柱を6.5㎝動かすことになるか、あるいは、柱の位置がずれている船鉾のように付け長押で調整するか、という判断になるかと思う。

植木委員長　船体と船体の水引幕については、調整は済んでいるはずだが、問題は屋形の天水引幕の方である。今言われたのは、柱での調整が可能かという話だが、その前提に、原寸の幕のサイズを基本にするのかどうかという点がある。因みに、船体部と4本柱の取り合わせは問題ないか。

末川委員　床面に穴をあけているところがあるので、手直しするところはあるが、現時点で問題はない。

藤井委員　私が言うのも数値上の話であって、幕をいっぱいに張って採寸しているため、懸装する場合は、鐶（かん）掛けにするか紐吊りするかで違うものの、多少の弛みが出てくる。船鉾の方にお聞きするのがいいのかも知れないが、全周がどの程度なのかを見込まないといけない。

末川委員　6.5㎝は妥当な線かということか。それと、もう一つご相談がある。艫の下の水引幕について、模様をみると随分周囲を詰めているのではないかという指摘があったが、幕板はすべてこれからの製作だ。寸法をどう考えるか。以前、構造設計をした時には1268㎜を側にとり、幅を1480㎜としていた。復原するにはこれが妥当かどうかを、藤井先生にお聞きしたい。

藤井委員

藤井委員　幕1480㎜は現状の寸法で、もともとはそれより大きかった。この部分がどれくらい大きかったかは、幕をほどいて、どれぐらい中に縫い込んでいるのか前の縫い跡が確認できれば算出できる。切断していた場合はどうしようもないが。幕を利用するならば、ほどいてみて余裕があれば戻すということになる。

末川委員　もし分からなければ、どれぐらいをみておけばいいか、先生にご判断いただけるか。

水野委員　1480㎜というとあと3.5㎝で5尺になる。尺貫法に基づく丸い数字を頭に浮かべながらやったほうがいいと思う。

植木委員長　全ては全体のデザインと絡んでくることだ。幕に合わせたために、船体部のバランスが落ち着かなくなる、というのは困るわけだ。手が加えられた幕を基準に数字を算出してもらったが、少し厳しい状況ともいえる。船体部は既に作られているのだから、その船体部のスタイルを優先して、一番落ち着くのはこのぐらい、と数字を出していただいて、それと調整しながら進めていかないと議論は空転する。逆にいえば、幕はこれくらい必要だという数字を出していただく。

吉田理事長　確かに残っているものを活かしたいという気持ちは分かるが、そうではなく、本体の形をしっかり立てて、その場合、何ミリというメートル法ではなく、尺貫法で割り切りの数字を出し、残存のものが使えるのか使えないのかを判断していただく。元のものに足すというのは非常に金のかかる作業だから、どこまで使えるのかを見通さないといけない。

植木委員長　そのあたりは掛け方の工夫もある。非常に古い形では、ぴたっと張り詰めず、部分的に掛けたようだ。

吉田理事長　確かに六角町（北観音山）でも修理に出せば縮んで仕上がってくる。四隅で少し開いてごまかすとかしている。ぴっちり引っ張るのと引っ張らないのでは若干違ってくるし、本体の形をしっかりと出す必要がある。

植木委員長　幕類はさまざまな問題を含んでいるが、どう調整するかはツメの段階で検討できればいいと思う。では次に、木彫に関して水野先生からご説明をいただく。

⑵木彫に関して

水野委員　大船鉾に彫刻がついたのはいつ頃なのかという根本の問題がある。私は江戸時代初期の祇園祭の鉾に彫刻があったのか明らかにできればと思うが、初期のことははっきりとはわからない。ただ、船鉾の絵はあるので、それを参考にみたい。愛知県知多半島の延命寺（南知多町）の洛中洛外図は、大坂の陣の時に戦利品として尾張藩に寄贈された屏風だから、恐らく慶長時代の船鉾の絵。江戸の前期までは、彫刻がついていたかどうかは疑わしい。江戸中期（宝暦年間）に入っても彫刻らしいものは全くみられない。切妻屋根なので懸魚がつくが、これは彫刻というより建造物の一部である。文化度再建以降、一番彫刻のついている絵は、個人蔵本の「祇園祭礼図屏風」であり、屋根の形は疑問に思うが、彫刻についてはかなり正しいのではないかと思う。全体を大きく、また舳先と艫も非常に詳細に描かれている。同様に詳細に描かれているのは江戸末期から明治に描かれた馬淵家本（幸野楳嶺）の「八坂神社・大船鉾図」。後ろからみると、屋形はこのような形になるのではないかと思うが、ただし、彫刻についてはアテにならないところがある。特に、屋形の側面、脇唐破風の彫刻は、拡大しても何の絵かさっぱり分からない。文化度再建の舳先彫刻の特徴は、一つは金幣、一つは龍である。個人蔵本の大龍は、色彩からみると白木ではなく、金箔が貼られているのではないか。馬淵家本をみても後ろ姿の龍で間違いないと思う。江戸期に貴人が乗っていた船（二隻一対）は、水難よけに「龍頭」「鷁首」がそれぞれついていたというが、船鉾には鷁首がついているため、大船鉾が龍で、対になっていたのではないか。どちらが先に付けたのかは分からないが、町同士で対抗意識があったのではないかと思われる。龍のデザインはこれから考えなければならない。龍の彫刻は横になっているのが多いが、立体で踊っている形は少ないので、参考例を丹念に探さなければならない。近辺でみると、百万遍（知恩寺）本堂や、彦根市の大洞弁財天（長寿院）に彩色された龍がある。大船鉾の舳先の龍は誰が彫ったのか。東山区の瀧尾神社拝殿の天井に吊ってある巨大な龍を彫ったのは九山新太郎という彫り物師で、年号的には天保 11 年ごろ。文化度再建より後になるので、大船鉾を彫った後で、これを彫ったのかもしれない。彼は法隆寺金堂の支柱（補強のため）の巻龍を彫っており、九山家は彫刻師として 300 年続いた家だから可能性は無視できない。中央の屋形では、側面の軒唐破風の兎毛通（うのけどおし）に「鳳凰」がついていたようだ。舳先の龍と、兎毛通の鳳凰はセットになっていたのではないか。主屋妻側背面の軒唐破風の卯毛通もやはり鳳凰である可能性が高い。懸魚に鳳凰のある例はたくさんある。名古屋市や知多半島の祭り山車は、瀬川治助、（藤原）重定、重光の作品が多い。丹波地方の祭り山車には、丹波柏原の彫物師中井家による彫刻がついている。福井県三国町三國神社には郷土出身の彫物師志摩乗時が作った白木の鳳凰がある。さて、艫部分の彫刻であるが、絵画資料は二種類に分かれる。馬淵家本は三面とも海馬である。個人蔵本では側面は海馬だが、背面は花が描いてあるので「唐獅子と牡丹」ではないか。ただし、文献に「三面とも海馬」と書いてあるものがあり、私としては判定しかねている。文化度再建の前は、側面と背面の主題が違ったようなので、側面と背面が同じであったとも、違ったともとれる。海馬は空想上の動物である。馬ではあるが、腹部に火焔がある。先例は非常に少なく、私の知る限り 4 例しかない。北野天満宮、高原院、観明寺、三峰神社。（海馬は、背中に甲羅のある「犀（さい）」と混同されていた時期がある。）唐獅子牡丹は、近世に用いられた典型的な図柄である。唐獅子も空想上の動物であり、牡丹は富貴を象徴するので、庶民の願望が込められていると思われる。背面を唐獅子牡丹にするかどうかは検討委員会で検討していただきたい。彫刻は、彫物師によって細部がかなり違うため、誰が彫ったのかが非常に重要である。可能性としては、九山新之丞、九山新太郎（新之丞の息子）、前川三四郎、長谷川与助、長谷川若狭あたりではないだろうか。以上である。

水野委員

植木委員長　木彫に関しては初めての研究なので、今後は議論が必要になってくるのではないか。確認しておくと、舳先の龍頭は別と

して、鉾の中に彫刻は少なくて、屋形の唐破風の兎毛通の鳳凰と、艫の海馬（あるいは唐獅子牡丹）の彫刻ぐらいだという。絵画資料は写生ではないので、全く当てにならない。祇園祭山鉾の特色は幕類であり、江戸中期以降かなりつくが、木彫は非常に少なく、あまりごたごたと飾らない、と私自身は思っている。さて、自由にご意見をいただければ。

京都市　艫屋形の高欄の部分についてどう判断するかで本体に影響するのではないか。個人蔵本では木彫のように見えるが。

水野委員　高欄をふさいでいるのは、資料によって彫刻にも見えるし、板を張っているようにも見える。建築的にきちっと描かれていない。神社に関係する模様か、町内の何かの模様かもしれない。菱形の何かの模様かもしれない。透かしで抜いたものかもしれない。

植木委員長　全体のバランス、デザインの問題だろうと思うが、高欄がはみ出す形でついている。

末川委員　確かに高欄が突き出て、艫の手摺りと高欄とが繋がっている。建築的に言えば、鴨川沿いの料理屋の手摺りにもこれに近い彫り物があり、水野先生が言われたようにモチーフ探しはできるのではないか。

植木委員長　船のスタイル、デザインをどうするかが基本にないと先に進まない。張り出し高欄の形を踏襲するかについて、考えはあるのか。

末川委員　前回、9 月 28 日に報告はしていなかったが、その点についてはどの絵画資料も大きな違いはない。張り出しの大きな高欄があるのは艫の屋根の部分であり、下のほうは船べりに合わせて高欄が周囲を回り、それが黒く塗られているという絵が多かった。この点についても、次回は個人蔵本を参考に絵を描いて来たい。楳嶺の絵は個人蔵本を参考に描かれていると思う。

植木委員長　細部の問題はあるが、まずは全体についてたたき台を出していただき、具体的な議論はあらためて次回以降にする、ということでよいか。

(3)錺金具に関して

植木委員長　では次に錺金具についてだが、久保委員が欠席のため、事務局に代読していただく。

京都市（代読）　昨年 11 月に久保先生に前懸の錺金具と大金幣の錺金具をみていただき、所見をいただいている。今回は所用のためご欠席で、資料を受け取っているので代読する。前懸の錺金具は江戸後期のものとみてよい。右最上段に付けられているものは補修跡がみられる。すべて前懸から取り外すことは可能だが、その際に足を破損しないように注意しなければならない。写真は、修理を施している金具と施していない金具（当初の鍍金のままのため色合いが鈍い）である。大金幣については、金幣箱に文化 13 年の年紀があり、錺金具もその頃のものとみられる。幣串の天冠の金具は菊花文様であり、作風の一致から上野天神祭の向島町の鉄英剣鉾の破風錺金具と同じ工房のものとみられる。配布資料に添付しているのが『三重県指定無形民俗文化財　上野天神祭総合調査報告書』の該当部分である。丸形で小形のもの 4 点のうち、巴紋の 1 点は後補。（図の右から 2 つめ）

植木委員長　残念ながら久保委員がご欠席のため、錺金具については次回の議題にさせていただいてよろしいか。それぞれの調査報告については、本体のデザインに深く関わってくるため、まとめ直していただき、まずはおおまかでよいので所見も含めて基本的な本体の形を出していただいて議論を進めたい。

③議事

植木委員長　では、4 の議事に移る。まずは事務局からご説明を。

京都市　今回は、7 月以降に専門の各委員に詳しく調査していただいた結果をご報告いただいた。末川委員に現在されている本体の設計とうまくリンクしていこう、ということで今日の委員会での報告となった。祇園祭山鉾連合会が主催されるこの委員会自体は、今年度文化庁の助成金をいただいている。今年度事業できれいな絵を完成させるのはなかなか難しいため、来年度も引き続き、山鉾連合会より文化庁への申請を出していただいてはどうか。ついては、どういう内容を出すかを事務局に代わり提案させていただきたい。お願いが二点ある。一つは、来年度はこの委員会を、末川委員に設計図を描いていただく中で、懸装品、彫刻等とのかね合いの出る部分をフィードバックして議論していただく場として位置づけさせていただきたい。そのために必要なのは船鉾の実地調査を末川委員にもう一度細かくしていただくことなので、それを含めて 3 回、計 4 回の検討委員会を開催させていただきたい。もう一つは、現在は白木しかできていないが、上屋を含めて設計を描いていただく。しかし、それだけでは一般にアピールする力が弱いので、検討委員会の成果として懸装品も彫刻も取り込んだ完成予想図を作る。さらに植木先生からのご提案が一つ。大船鉾の復原事業は、これだけたくさんの専門の先生方に集まっていただき、3 年かけている。日本全国で山車屋台は 1000 以上あり、一昨年から文化庁の助成で曳山を復原していこう、あるいは新しく作ろうというところもたくさんある。大船鉾は文化庁の助成も受けたことだから、これまでの 3 年間の成果を報告書に仕立てて、文化財の関係者や山車屋台の関係者に配布し、還元していけないかということだ。この 3 つの事業化を考えているが、いかがだろうか。

植木委員長　完成予想図は、一般向けのアピールも含めてぜひ入れたいという主旨だと思う。私の提案である三点目は、完成に結実するまで積み上げた議論を報告書としてまとめて、成果として共有していきたいということだ。委員会の検討は 4 回ぐらい考えているということでよろしいか。

京都市　実は今年は 5 回の委員会を考えていた。今日が 4 回目だが、年度末までにあと 1 回開催する意味があまりないので、調査をもう少し進めてからと考えた。来年度は 4 回ぐらい開催し、秋頃に設計図ができて、そこから報告書づくりにかかってはどうか。大半は議事録の集成になるだろうが、それだけでは品格に欠けるので、いくらかは書き起こしていただければと思う。

植木委員長　各委員の所見をまとめた形でいただきたいということ。その原稿を秋頃にお願いしたいということだ。基礎的なデータ、特に藤井委員の懸装幕についてなどは非常に重要だから、これはそ

のまま載せさせていただく。そういうことを京都市のほうで詰めて、方針を出すことになるかと思うのであらかじめお含みいただきたい。ただいまの提案について質問はないか。保存会のほうもないだろうか。先生方には、少なくとも4回委員会をお願いし、その間に調査等も踏まえたさらなる詰めがあるかもしれないが、よろしくお願いしたい。質問がないようなので、以上をもって今日の委員会を終わりたいと思う。

吉田理事長　実は2月1日に、大船鉾に載せる4体の人形のうち2体（神功皇后と磯良）の着用なさる単衣狩衣の製作がほぼ完成したので、林駒夫先生と西陣織工業組合理事長の渡文（渡辺隆夫）さんに伺ってきた。非常に立派なものができた。特に神功皇后の単衣狩衣は、祇園祭の山鉾で、誂えたり、新調したりした中では抜群にいいものだ。というのも、今までの仕事は現行の手に入りやすい糸で縫っていたが、今回は当時の糸に近いところまで辿り着かれて、難渋な作業を伴いながら完成されたものだ。西陣織物工業組合としても、これは後世に残る立派なものと自負されていた。町内の方も納得されていると思う。ただ、先ほどから出てくる絵画資料では、磯良の姿は青地の錦織物を着ておられるが、本当は赤地である。人形に詳しい林駒夫先生の見識でそのようになっているので、絵と違うではないか、ということにならないように予めご理解をいただきたい。以上である。

植木委員長　絵の信憑性は必ずしも100％確実なものではない。参考に過ぎず、それぞれの立場から「これでいい」という方向で詰めていくとならざるを得ないと思う。

事務局　本日の議題はこれで終了させていただく。本年度中にもう1回というのは時期尚早とのことで、来年4回ほどご審議いただき、基本設計に至る、という道筋で、今後ともなにかとご協力いただきたい。（以上）

第5回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成24年5月21日（月）午後2時～4時
会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）
出 席 者：植木行宣委員長、小嵜善通委員、久保智康委員、末川協委員、林駒夫委員、藤井健三委員、三上皓造委員、水野耕嗣委員
（以上委員、五十音順に記載・敬称略）
京都文化博物館祇園祭展示担当者
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都府商工労働観光部染織・工芸課
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
（以上オブザーバー）
公益財団法人祇園祭船鉾保存会　（傍聴）
公益財団法人祇園祭山鉾連合会
公益財団法人四条町大船鉾保存会　（以上事務局）

《議　事　録》

①文化庁補助事業の結果報告

植木委員長　文化庁補助事業の結果報告をお願いしたい。

京都市　祇園祭山鉾連合会が申請主体となり、祇園祭総合活性化事業として、文化庁に平成24年度の文化芸術振興費補助金（地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）の申請を行った。東日本大震災の影響もあり、シーリングにあったが、山鉾連合会が計画していた事業のうち、この大船鉾復原実施設計図作成事業には、重点配分をして、予定通りの事業を実施できることになった。

吉田理事長　少し補足させていただく。祇園祭山鉾連合会としては、今年度この大船鉾の屋形復原実施設計図作成及び成果報告事業以外に、保昌山の胴懸の修復事業を申請したが、それは却下された。却下されなかった事業として、京都近郊の祭でつかわれている渡来系染織品の調査及びその報告書の出版事業、これまでに調査を終えた祇園祭が使っている国内の染織品の調査報告書の出版事業もあったが、今報告があったような事情で、それらについては、次年度以降に延期するなどの対応をしている。

②本年2月以降の調査及び協議報告

植木委員長　第2議案「本年2月以降の調査及び協議報告」について、末川委員からお願いしたい。

末川委員　昨年9月に私が出した叩き台について、委員やご町内からいただいたご指摘を、全体のデザイン、屋形部分、艫屋形、彫刻その他の装飾の項目に分けて、箇条書きでまとめた。また、2月の前回委員会以降に出たご指摘を分けてまとめ、それを図化している。吉田理事長からは屋形の軸組構造をしっかり検討するようご意見があり、船鉾ご町内の全面的ご協力をいただき、先日それを見せていただいたし、船鉾の実測もさせていただいた。

植木委員長　今のご説明で宜しいだろうか。続いて、その結果が具体的には実施設計にどのように反映されたのかを、末川委員からご説明いただきたい。

③大船鉾屋形の設計に関して

末川委員　配布した5月15日付A3資料、図面番号G01～G07をご覧いただきたい。G01は屋形の全体図。囃し方さんの位置や、人形の位置などから考えて、これで良いかご検討いただきたい。G02は屋根の伏図。日本の古建築本来は桧皮葺であるが、絵画資料では銅板、文献資料では銅板、実際の船鉾も銅板であり、迷うところだが、銅板葺を想定して設計図を描いた。屋根は10分割できるようにな

っている。これで良いかご相談したい。G03は天井の伏図。絵画資料などでは分からないものだが船鉾を参考に作った。大屋根の下の四角い部分は格天井で、船鉾では花の絵が描かれた格天井になっている。これもこれで宜しいかどうか、ご検討いただきたい。G04の断面図とG05側面図は、以前は船鉾の現状の影響を強く受けて、後に伸ばしていたが、バランス良くするために、中心より前と後を、艫の屋形も含めて、対称形になるようにした。また、ご町内のご意見を入れて、本体と艫の屋形の幕の高さを揃うようにするなどの改良を加えた。G06は前姿・後姿図である。以上、よろしくご検討いただきたい。

植木委員長　この設計図案について、人形をご担当いただいている林先生から何か意見はあるだろうか。これでよろしいか。

林委員　先日、京都府染織・工芸課の事業で、神功皇后と磯良の大変立派な装束をご用意いただいた。それにあうような格調の高い人形にしなければ、と思っている。人形の高さと、鉾の屋形の天井高の問題も、この設計で大丈夫だと思う。

植木委員長　設計図に関しては、建築のご専門の先生がお二人いらっしゃるので、ご意見をお伺いしたい。

三上委員　図面番号G06の唐破風の下の突起物は、茨というのもので、ここは良いのだが、前の頁のG05には茨が付いていないのはおかしい。これは付け忘れられたものかと思う。唐破風の続きが直線になっているが、直線ということはないはずなので、他の例をよく調べていただきたい。また、唐破風の前から見える部材（唐破風板）は普通一枚板では作らない。真ん中で切って、左右対称に作って合わせるものなので、そのように表現していただきたい。艫の屋形の高欄の下の部分に縁板というものが普通は付くのだが、付いていない。それはどう考えたのか。

末川委員　G05の茨と唐破風のかたち、真ん中で切るということについては、ご指摘通りにしたい。縁板については、おっしゃるようにしたほうが、建築的にはおさまりが良いのだが、絵画資料ではそうなっていなかったので、そのようにした。

三上委員　古建築の概念ではそう思うが、船鉾さんの例などもよく研究されて、再検討されると良いと思う。

水野委員　屋根の素材は、もともと桧皮葺であったものが、耐久性、保存性を考えて金属になっていったものだろうと思うので、私は銅板葺でいいのではないかと思う。

吉田理事長　文化9年（1812）の『祇園御霊会細記』には、金物で葺いているとはっきり書いてあるから、それで良いと思う。

植木委員長　銅板の厚さにもよると思うが、重量的には問題ないか。

末川委員　問題ない。

植木委員長　さきほど、末川委員が、説明の途中で提起された天井についてはいかがか。

水野委員　より格が高いのは、平の格天井ではなくて折上げ格天井。せっかく新築するのだから、そのように考えてみては。

末川委員　ご町内でもそういう意見があったが、他の鉾に合わせた。

吉田理事長　折上げ天井なのは北観音山だけで、金箔の無地。船鉾は平の格天井に絵画装飾。確かに、折上げならば天井の高さは稼げるが、それほど効果があるかは疑問である。

植木委員長　ご町内のお考えはいかがか。

四条町　今回大変お世話になっている船鉾さんが格天井なので、張り合ってそれより格上みたいなことにはしたくない。

水野委員　張り合ってより良くするのが祭の本来の姿でもあるのだが。

吉田理事長　おっしゃる通りだが、今回の大船鉾復原に対する船鉾さんの協力については、普通よその町内のために、あそこまで協力するかというほど、何もかもさらけ出して、労を惜しまず協力しておられる。それは仲間として、また仲間を纏めている私としては、本当に嬉しく思っている。だから、当のご町内の方が、そのように言われる気持はよく理解できる。

植木委員長　ご町内、連合会のご意見はそういうことでもあるので、それを尊重してここは平の格天井ということでいこう。

藤井委員　別の問題だが、艫の屋形の下の幅は、残っている掛け幕の寸法と合わせてあると考えて良いか。それと左右の水引幕の寸法も。ただ、水引幕が合わさる部分に金具が付いていて、それを使うとしたら、少し間があいてしまうのだが。

末川委員　おっしゃる通り、それは悩ましい問題で、私は実は寸法を決めかねていた。

藤井委員　長刀鉾のように、下幕をつけて、その前に古い少し寸法の足りない幕を掛けるという方法や、合わさる部分に房を垂らして収まりをつけるという方法もある。

植木委員長　おっしゃるように、これまでの歴史のなかでは、下幕をかけて、表に少し寸法の合わない絨緞を掛けたり、額縁のような掛け方をしたり、色んなやり方をしているので、今残されている切り縮められた布の寸法にこだわって、これから復原する鉾の寸法をそれにきちんと合わせるよりも、構造物としての全体のバランスとか、強度とかから大局的に判断すべきだろうと思うが、ここで議論をしても先に進めないので、その点については、藤井先生ともう少し細かく摺り合わせをやってもらい、それを設計に反映できないか。

末川委員　了解である。

吉田理事長　染織品というのは時間が経つと伸び縮みするものだから、そういう問題は現場の仕事になるのではないのか。

植木委員長　この問題は、将来また手直しの必要が出てくるかもしれないが、一応基本設計として、本日提出された原案を委員会として承認して、次のステップに進んでもらうということでよろしいか。

一同　異議なし。

植木委員長　議案③については、そのようにする。これで先が見えて来たのではないか。屋根は銅板葺ということになったが、大事なのは木材部分で、基本設計の段階で材質としてはどのようなものが望ましいかということも、仕様書に付記しておいてほしい。

末川委員　了解である。一般的に床の間の床板と同じく、一番グレードの高いのが松、次が檜、桜、栃と言われている。できればアカスギを削り出して使いたい。

植木委員長　ボディの部分は、芯去り材で一対のものとして左右両取りをしないと、将来狂いが生じる。

吉田理事長　芯去りのマツ材というのは、非常に得にくい。よほど早くから手配しないといけない。奈良県桜井市の株式会社金幸が、かなり良材を探す力を持っている。

三上委員　その金幸が、錦帯橋の架け替えで材料を探したときに、ついでに良い部材が見つかったという。そういう可能性もあるから、先に相談しておくほうがいい。

植木委員長　南観音山の修理のときには、良材を得るのに苦労をしたが、たまたま僥倖があって、良い材木が見つかった。

三上委員　比較的得やすいのは欅だが、それでも大木は得にくい。

植木委員長　そういうこともあるので、50 年ほど前に集成材の利用を検討したことがある。今回は新しい製作だから、天然材にこだわらず、そういう可能性も考えて良いかもしれない。

末川委員　集成材は確かに強度があるが、接着剤の耐久性についてはわかっていない。集成材が公共建築に使われるようになり、まだ 25 年程しか歴史がなく、その間、実はあまり技術的な発展がない。将来のことは誰にもわからないので、経年劣化を考えると恐ろしい。

吉田理事長　2014 年に鉾を立てるということを優先して、焦って良材が得られないということがないように。そのときは菊水鉾の部材を借りてやるということで考えてもらいたい。

植木委員長　南観音山の古い部材なども使っていなければ、脂の乗った非常に良い材料なので、使わせてもらえばいいのではないか。一度ご覧いただきたい。

三上委員　古い大きな部材の再利用は検討の価値があると思う。

④今後のスケジュールと報告書に関して

植木委員長　次は今後のスケジュールと報告書に関してである。京都市から原案の説明を。

京都市　この 2 年半の経過を報告書として残し共有するために、冊子として配布しようと計画している。ただ、加飾の部分をどう扱うかによって、内容もスケジュールも体裁も違ってくる。叩き台として、配布資料 2 頁にあるような本年度のスケジュールと、報告書の内容を考えている。

植木委員長　報告書を作ることには、どなたもご異議はないと思う。内容は、この骨子案をもとにこれから考えるとして、先ずは今後先生方に原稿を書いてもらう可能性があるのを、ご了承いただきたい。

吉田理事長　報告書を出す費用については、文化庁の助成金で購えるのと考えてよいのか。

京都市　そのように考えている。

植木委員長　報告書に何をどのようにどの程度盛り込むのかというのは、予算との兼ね合いでも決まるのだろうと思う。しかし、どの時点の記録までを報告書に入れるかということ、例えばすでにある懸装品などについては問題ないが、これから作る木彫や塗りや、金具をどうするのかについて相談したい。例えば、報告書の発行に間に合うようにと焦って想定して描いてしまわないように、原稿入稿の時点で可能なものに限ることとし、残されたものは今後の課題として明記しておく。その後の取り組みも、ご町内で適当にやるということではなく、祇園祭山鉾連合会に諮って、その承諾を前提に取り組んでいくということで、委員の皆様のご了解をいただきたいと思うがどうか。

吉田理事長　どの鉾も、長い時間をかけて現在の姿になってきたものだ。船鉾さんの高欄の金具でさえ、10 年と少し前に付けられたものだ。だから大船鉾もゆっくり時間をかけて完成していかれれば良いと思う。あわてて最終形を出す必要はない。

京都市　それはそうだが、大まかな完成予想図は募金を集めるためにも必要なので、描くことはお許しいただきたいと思う。

植木委員長　もちろんそれは必要だろう。ただディテールまでそれには拘束されないということで、皆さんそういう理解でよろしいか。

一同　異議なし。

植木委員長　これで本日の議題の審議は終えたが、その他何かあるだろうか。なければ、進行役を事務局にお返しする。

京都市　今後のスケジュールを確認させていただきたい。お手元の資料のとおり、今年の祇園祭に船鉾さんの追加調査、装飾のデザイン検討を経て、先ほど申しあげた復原想定図を作成し、次回 9 月の委員会でお諮りすることを考えている。その時には人形について林先生からどうするかという案をお出しいただけると思っている。

事務局　本日もお忙しい中、大船鉾復原基本設計のために、お集まりいただき、熱心にご討議いただいたこと、また船鉾保存会の全面的ご協力をいただいていることについて、改めてお礼を申しあげる。本日の会議はこれにて閉会とする。　　（以上）

第 6 回大船鉾復原検討委員会は現地調査

開催日時：平成 24 年 7 月 12 日（木）、13 日（金）、16 日（月）

会　　場：船鉾（京都市下京区船鉾町）

第 7 回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成 24 年 10 月 23 日（火）午後 2 時～4 時

会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）

出 席 者：植木行宣委員長、小嵜善通委員、久保智康委員、
末川協委員、林駒夫委員、藤井健三委員、三上皓造委員、
水野耕嗣委員　　（以上委員、五十音順に記載、敬称略）
京都文化博物館祇園祭展示担当者
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都府商工労働観光部染織・工芸課
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課

（以上オブザーバー）

公益財団法人祇園祭船鉾保存会　（傍聴）

公益財団法人祇園祭山鉾連合会

公益財団法人四条町大船鉾保存会　（以上事務局）

《議　事　録》

①報告事項

植木委員長　いよいよ大船鉾復原も大詰めを迎え、今日はかなり具体的な審議をしていただくことになるので、よろしくお願いしたい。まずこれまでの報告をお願いする。

京都市　議事に入る前にご了解いただきたい。文化庁の補助金を得ていることもあって、2年間計8回に渉る大船鉾復原検討委員会の成果を一冊の本にまとめ、全国の屋台保存会に供する、ということが先の委員会で合意された。事務局では、最終形は一般市民にわかりやすくイラストを入れようということになった。今日はイラストレーターの中川氏に同席いただいた。

四条町　ご神体衣装は、平成23年度京都府の未来を担う人づくり推進事業の助成を受け、林駒夫先生の監修の下で西陣織物工業組合に発注したものが無事に完成し、6月16日に池坊短大にてお披露目の会を行った。7月の宵山期間中は会所飾りで披露した。新調したのは神功皇后の狩衣と磯良の厚板である。続いて、欄縁の製作について。今春に、黒主山さんより部材の支援の話をいただいた。基本設計が確定した中から部材を考えて、26年巡行までに必要な欄縁製作の費用のうち黒塗りをお願いすることにした。欄縁製作には最低10ヵ月を要するので黒主山さんは今期の事業計画に折り込みたいと言われ、こちらも来年の祇園祭に間に合うようにしたいので、検討委員会に諮る時間もなく、市文化財保護課を通して7月末に植木先生と三上先生、末川委員に相談し、石川漆工房で漆を塗るという承認を得た。現在、竹田工務店で木地を作成している。今日は石川漆工房の石川社長に来ていただいた。石川氏は保存会賛助会員で、四条町大船鉾の囃子方でもある。祇園祭では黒主山の宵山用欄縁の修復を手がけておられる。

植木委員長　委員会で諮る時間がなかったので、関係委員に持ち回りで協議していただき、末川委員が取りまとめられた。今日の委員会で追加承認をお願いしたい（承認）。細部については、石川氏より説明をしていただく。

石川氏　この度は黒の呂色（ろいろ）仕上げで行うことにした。呂色とは、塗りの最後の工程上塗りをした後に上から炭で研いで磨いて、上摺りという最も精製度の高い漆を摺り込んで磨いて仕上げる。

吉田理事長　欄縁の構造が、普通の曳山（コの字型）と違うので注意が必要だ。

石川氏　竹田工務店に頼んで、檜の板をためたり曲げたりせず、分厚い板を削って「作り出し」てもらい、漆を試しに塗らせてもらった。漆はとても強靭な力を持つため、アールがどのぐらい元に戻るかという実験もしてみたが、今回使う檜は構造材に使うぐらい硬いのでほとんどひずみもなかった。つやありとつや消し（呂色をした上であえてつやを消す）、どちらがよいかご指示いただきたい。

吉田理事長　それは町内で決めていただいたらよい。

植木委員長　呂色仕上げというきちんとした工程を経るということが確認された。つやのあるなし、どちらを選択されるかは保存会にお任せする。特にご意見があればどうぞ。

石川氏　つや消しの方法は何種類かあり、いったん呂色をしてから上塗りという漆を摺り込んでつやを落とすという方法だ。

植木委員長　強度には影響がないということか。今すぐでなくてよいが、保存会はどちらがいいと思われるか。

四条町　つやありの方がよいと思う。

植木委員長　金具などが将来どうなるかということと絡んでくる。どちらにせよ退色は避けられないということか。

石川氏　漆の敵は紫外線だが、これは避けられない。

植木委員長　では最終的な判断は保存会にお任せする。衣装の新調も進み、欄縁も進んできて、巡行復活がすぐそこまで見えてきた。この後、細かい部分で課題が出るかもしれないが、このような協議の場で具体的に論じていただけると有り難い。

②屋形の設計に関して

末川委員　前回5月21日の委員会で指摘いただいた点を箇条書きにまとめた。屋根仕上げ材料は、船鉾屋根の詳細調査及び文献資料・絵画資料より銅板ということで決定した。屋形の高さと長刀を持つ人形の収まりについて林先生にご相談したところ、長刀が収まれば現状で問題はないという判断をいただいていた。前回も船鉾さんに来ていただき、張り出し高欄等にはじめから化粧金物がいるかという議論があったが、後からでも可能となった。水野先生からは、屋根のケラバ箕甲がいるのではないかという指摘があったが、絵画資料に基づき、箕甲は付けないことで了解を得た。屋形の天井部分については、折り上げは行わないというのが町内の意向だ。唐破風軒は茨垂木とする。9月14日に藤井先生と打合せした。艫屋形の幕板は、南北寸法は変えず、東西寸法は2寸ずつ広げることになり、本日付の図面はそのとおりに改訂済み。他にも幕の取り付け金具の指示を細かくいただいているが、詳細設計への反映はまだである。そのほか、艫の頭貫の成を少し大きくすること（台輪の成を小さくすること）、花頭窓の外周の曲線が反転しないようにすること、上下の欄干の地覆の下に地板の小口が現れるように、といった点を修正。装飾については、懸魚の縦長はよくないとして0.8掛けに修正。撥束も蓑束に修正、破風板の合掌の部分には分割の目地を標記することにした。技術的な課題、特に屋根の固定方法については、接合部は突き付けの上、銅板の笠木を被せ閂金物で固定。分割は大屋根片側7分割、前唐破風4分割、後唐破風2分割の合計20分割。部材のリストはまだ作成途中である。以上をもって、全体及び各部のデザインの確認はだいたい終わり、この後は復原想定図の作業に引き渡すことになる。立体的なデザインについては四条町で模型を作られるので、あとで共有させていただきたい。

植木委員長　基本的な方向は前回協議いただいたので、特に問題はないと思う。進行は部分ごとに行うので、取り合わせがうまくいくかが最も大きな問題だ。意見がなければ、微調整についてはこれでよろしいか。（承認）それでは、案1、案2と出ている屋根の形に

ついて具体的な協議をいただきたい。末川委員から説明をお願いする。

末川委員　屋根の端部の収まりについて 2 案用意した。［案 1］は船鉾を踏襲し、軒側にも塗り材が廻るデザインだ。縁を付けている。船鉾では漆の上に金具が付いている。［案 2］は、絵画資料に近い形で、破風板の上に屋根が乗っている。植木先生は天井を高くしない、大きくても長押を付けず、何もない形がよいということだった（もし具合が悪いということになれば、後で追加することも可能）。私も［案 2］の方がよいと思う。3 ページ以降は［案 2］の詳細だ。

植木委員長　デザイン的には［案 2］のほうがシンプルで、［案 1］のほうは手が込んでいる。最終的には保存会に任せることになるかもしれないが、先生方いかがだろうか。

水野委員　分割することも考えて、やりやすいかどうかにかかってくる。

植木委員長　人形飾りも入るのであまりゴテゴテせず、なるべく簡素に仕上がった方がスマートで京都らしいと思う。

末川委員　塗り材は、屋根でなく、破風板にくっつけているので、補強ではなく、飾りだろう。銅板の鼻先が摘みっぱなしでいいのか。こんなふうに破風板と一体になった板状のものがぐるりと回った方がいいのか。

水野委員　そこに飾りがあると、雨が降ったら傷まないか。

船鉾保存会　雨には頻繁に打たれているが、なんの変化もない。

吉田理事長　確か船鉾さんがそこに飾り金具を打ったのはそれほど古い話ではないはずだ。

船鉾保存会　江戸時代はなかった。明治以降である。

水野委員　京都の山鉾は絶えず変化しているから、どこの時点をモデルにするかだ。全国の屋台で屋根に飾りが付くのは珍しいと思う。京都だから他所とは違うということで付けたのではないか。

植木委員長　装飾は時代とともに少しずつ少しずつ増えていき、豪華に見える方向へ進む。シンプルな形でとりあえず復原して、将来加飾が必要となれば手当するというふうに進行形で考えたほうがよい。柱などを含めた金具などは全体のバランスの上でできあがっていくと思う。シンプルな形でいくほうがよいだろう。

吉田理事長　せっかく船鉾さんに実測させていただいて、設計図ができているわけだが、飾りに違いがあってもいいのではないか。構造に関係することであれば協議が必要だが、植木先生の言われたようにシンプルな形から進行形で考えるのがよいだろう。

植木委員長　人形の作り山だから、人形を主体に考えて、器はなるべくシンプルに。

四条町　まず基本形を作り、後からいろいろ増やすというのでは行政上の引っかかりはないか。

京都市　これは有形指定を受けない新しいものだから限度はあるが可能である。

植木委員長　菊水鉾も実質、金具を後から付け加えた。加飾部分は保存会の考えが優先するから、文化庁もそのあたりは審議会に任せるだろう。では、屋形については［案 2］のシンプルな形で設計を進めることが承認されたとする。

③金工品について

京都市　想定復原図を描く必要があるため、錺金具については「妥当なところでここにこういう文様がいる」というところまで今日は進めていただきたい。久保先生には、現存しない、架空のものを想定していただいた。現存の遺品については、神功皇后天冠は修理の上使用、幣串金具はそのまま使用可能か（久保先生の見立てでは、伊賀上野の天神祭と同じ時期に同じ工房で作られたものであり、この菊模様を高欄部分の錺の参考にしてはどうか）、前掛金具は一部修理の上使用（外して使う場合には留め金が破損する恐れがあり慎重に修理のこと。前掛新調の場合は取り外して付け替えか）、後掛金具は修理の必要性を検討した上で使用、舵部金具と舵黒房金具はそのまま使用可能かという指摘をいただいた。問題は次の、新作の必要性がある金具である。本体の高欄部分に、架木の上に加飾（先述の菊模様）が必要（2 つの絵画資料に存在）である。欄縁錺金具は絵画資料ではみえにくいため、今回の想定復原図には入れず、船鉾に準じるか否かはいずれ考えていただく。垂木先については先程の通り付ければどうか。前拝軒下の水引吊り用木枠は図面には描き入れられていないが、付ける必要があると思われる。船鉾さんは朱塗りの木部に金具を回している。艫部の幕板、艫部の高欄上下などは絵画資料に出てきているので必要か。一方、絵画資料には出てこないが艫部の底の舵の根元は、船鉾さんは豪華な金具が付いていて、舵は船にとって見せ場の一つであり、見上げると豪華だ。とりあえず判断は先送りにするが、将来的には検討すべきかと思う。想定復原図を描くという目的で言えば、委員会で決めてもらいたいのは、屋根の垂木先に金具を入れるのがいいのか、前拝軒下の水引の吊り用木枠の金具をどうするか、後方船縁幕板の金具をどうするか。ご意見があれば伺いたい。

久保委員　基本的な方針として、絵画で確認できる点は原則そのままというのは異論がないと思う。ただし、欄縁の錺金具を船鉾に準じるか、水引吊り用木枠の金具をどうするか、艫部の底の金具をどうするかというのは位相の違う話だ。艫部全体に金具があって悪いわけではないが、全体の装飾性のバランス、落ち着き加減を考えて優先順位を付けたらどうか。船鉾さんは、朱塗りの部分にかなり金具が付くのが特徴でかなり豪華だが、その割に唐破風回りに金具がない。これらは時期的に後から付けた装飾だろう。

吉田理事長　長らく休み山であったものが再建される。最初から金物を打った欄縁では出ない。うちの町内は天保 2 年には白木で出ている。天保 4 年に黒塗りになる。金物は一番後回しだ。祇園祭の金物が立派になってくるのは化政期以降のことだ。

久保委員　寛政期ぐらいではまだ門金具があまりない。長浜ではもっと早くから派手な金具が付いているようだが、化政期に急激に増え、天保の頃に立体的な金具が多数使われている。そんな流れを確認することができるから、今回金具回りを文化頃のイメージでいくならば落としどころはそれでいいのではないか。

植木委員長　金具については、補強金具は別として加飾の部分は最終的に進行形で付ける。計画には、どういう優先順位でいくかと付記するぐらいでいく。

末川委員　ところで、艫部の上の高欄や、張出高欄の親柱に擬宝珠が付いている。製作費を見積もる時、ろくろでの加工より、既製品の擬宝珠を買ってきてはめた方がよいだろうという判断になったが、それは恥ずかしいことだろうか。

植木委員長　それは協議を受けて、後で専門の立場から直接指導を受けていただく方がよいと思う。

吉田理事長　欄縁などの装飾の金物と擬宝珠は少し性格が違う。

植木委員長　擬宝珠はないと落ち着きが悪いだろう。それでは金工品については承認でなく、とりあえず承知いただくということをお願いしたい。

④彫刻について

京都市　配布資料P. 11に案を挙げた。P. 12―19は水野先生に書いていただいた原稿である。木彫は一切遺品類がないので、すべて一から作ることになる。水野先生が一番気にしておられ、町内の意向もまとまっていないのが、(1)舳先の龍を、幣串とどう使い分けて出すのかという点だ。(龍が付くなら金箔仕上げ) (2)絵画資料では、屋根の左舷の唐破風に鳳凰が入っているため、右舷も、屋根の前と妻側にも、同様に入っていると想像できる（4面）。(3)艫部幕板左舷には絵画資料から海馬が認められるが、個人蔵本では無彩色あるいは黒漆、黒檀のようにみえるが、楳嶺本では彩色されており、これをどうするか。(4)艫部幕板後側は、楳嶺本では海馬だが、個人蔵本は唐獅子・牡丹になっており、これをどうするか。(5) 後方の船縁幕板（艫部に接合する部分）は、個人蔵本では植物の文様が透かし彫りされているようにみえるが、楳嶺本では彩色で菱形紋のようにみえる。両方とも透かし彫りのようにもみえる。右舷は想像するしかないが恐らく同様。これをどうするか。屋根の軒唐破風の鳳凰に関しては、水野先生より補足をいただく。

水野委員　残っている大船鉾の図は鳳凰が正面を向いている。全国的にみると正面向きは非常に少なく、首を振るスタイルのほうが圧倒的に多いのだが、流派により様々なため、どういう図柄にするかは将来検討すればよく、鳳凰というテーマだけは持っておく。鳳と凰の雄雌一対を考えれば金箔仕上げである。艫部幕板の海馬については、楳嶺本では左舷も（右舷も）後ろ側も海馬だが、個人蔵本は左舷の海馬に対し、後ろ側が唐獅子・牡丹であるから、これをどうするかは町内で決めていただければと思う。船縁幕板の透かし掘りは、図柄を探しているがよいものが見つからない。欄間的な透かし彫りだと思うので、拡大して似たものを町内でアレンジしていただくのがよいと思う。左右とも上のほうの図柄は同じで、下の図柄が少し違う。これに類したものにしておくとよい。

京都市　これらは直接、想定図に反映されるが、どう考えるべきか。

吉田理事長　大事なのは舳先の龍が大幣か。昔は、北四条町と南四条町の2つに分かれて、1年交替で巡行を受け持っていた。今残っているものは南のほうの金幣である。最初から2つを用意して隔年に使わなくても、大金幣を前面に押し出していけばよい。大金幣は今までの会所飾りで充分に有名である。そして今は町内一緒に出されるのだから隔年交替という考えは必要ない。最初から龍の彫り物を準備する必要はないと思う。

植木委員長　明快なお話を頂戴した。将来的に選択肢を持っておくにせよ、とりあえずは金幣でよいという話だが、いかがだろうか。

水野委員　そうすれば、無理に龍頭を作る必要はないかもしれない。

四条町　絵画資料で金幣が描かれているのは1枚だけで、後はすべて龍頭だということを考えると、龍の頭は意味があったのかと思う。将来龍頭を作る際、誰に頼めばよいだろうか。

水野委員　中世は金幣ばかりだったと思う。龍頭になったのは文化時代の再建の時らしい。中世以来、金幣を繋いできたことが一つの考え方としてあるなら、龍頭を無理に作る必要はないかもしれない。（将来的に余力があれば作ってもよい。）

植木委員長　ご意見はまだあるかと思うが、舳先についてはとりあえず金幣の方向で進むということでよいだろうか。ただ、全体について言えることだが、今は楳嶺本、個人蔵本をミックスして考えている。絵画資料も（いつの時代を描いたかが違うにせよ）こんなに違うと信憑性の点で問題がある。絵画は参考程度と割り切って、デザインは全体イメージの中で京都の祇園祭に相応しいことを基本に考えたほうがすっきりするだろう。例えば、楳嶺本で通すということならそれも一つの案だが、微妙に違うものをミックスして折衷案にするのだけは避けたほうがよいと思う。

吉田理事長　確実な資料は、文化9年から11年にかけての『増補祇園会細記』だ。屋根を銅板で葺いたという記載はあったが、木彫や金具の細かいことまでは言及していない。

植木委員長　目立つことしか書かれていないので、この案件については、直接参考にならない。想定図を描く時には、水野委員の調査結果に即し、全体のバランスの中でこの部分はこういうテーマでやっているのだと言えるように。

京都市　金具の模様などは分からないが幕板の模様などは想定図にはっきり出るので、製作者や町の人たちと相談して、このデザインでどうかなど何回もやりとりをして図案化していきたい。

植木委員長　今回は絵画資料に基づく推測を報告していただいた。それを踏まえつつ新たに全体をみながら整備していただく。実際の施行にあたってはさらに細かい調整が必要になってくるだろう。

⑤ご神体人形について

京都市　配布資料に林先生と協議した結果を案として載せている。基本は面にするか人形の顔をみせるかの選択があるがそれは実施設計の時に決める。神功皇后は、江戸中期以前の絵画資料では座像のものもあるが、今回は立像でいくことになった。頭は木彫で面、髪は黒垂れ、衣装は白衣の垂り首、緋袴で、沓を履き、アクセントに腰帯をしている。持ち物は右手に扇である。磯良については、立像で決定。頭は木彫で赤熊だが、個人蔵本も楳嶺本もそれに角のような剣を刺している。船鉾の磯良は天冠を被っていて龍の尾がみえる。磯良は古い絵画資料では2本の角を持つものがあるが、船鉾の天冠のデザイン、個人蔵本、楳嶺本を参考に、剣があるほうが収まりがよいので、そのようにしたい。衣装は厚板に半臂、大口袴の黒帯、持ち物なしである。鹿島は立像で、壮年の態にするようにとの

ご指摘があった。黒垂れで立烏帽子、衣装は白衣（あげ首）、茶色の狩衣、白袴に腰帯。そして右手に長刀、左手に唐団扇に立ちを穿く。住吉は年寄りの態で立像、木彫で白髪、折烏帽子、あげ首の白衣に萌黄色の狩衣で、弓を持ち、背中に矢壺と矢、太刀を穿く、という形だ。船鉾の調査では大口袴といえども小振りに作ってある（囃子方が乗るので配慮すること）というご指摘をいただいた。

林委員　資料は昔の文献から探り出して、表にまとめたもの。復原に当たっては、神体人形が最も大切と言っていただき、私の立場としてはたいへん嬉しい。人形は能装束にするのが一番京都の風情に適っている。能装束風にするとなると約束事があるので、あとは必要なものをどうするかというだけの問題になる。一つだけ気になるのは、能姿は見栄えもよく、宵山飾りには大変相応しいが、鉾の上には囃子方がたくさん乗るので、能姿では大仰すぎるし、囃子方の汗の浴衣で触られてだんだんとへたってくるのが現実だろう。本当は宵山の衣装と巡行の衣装の 2 つあったほうがいいと思うぐらい。船鉾さんの神功皇后の宵山飾りの衣装は一応大口袴と半切になっているが、本物の能装束の大きさとはまったく違う。本物の大口袴はいかに大きくみせるかという意味で「大口」だが、鉾の上に上がるとかえってじゃまになる。ただ、想定図のために今どうするかを決めるとなると、能装束にするということだと思う。

吉田理事長　来年度新調事業の中で大船鉾衣装新調の枠が事業費で 690 万円（うち、町内負担が 138 万円）となった。この前はいくらか。

四条町　神功皇后と磯良 2 体で 630 万円。

京都市　ほぼ同額の予算が付いている。

植木委員長　人形衣装は能装束風を基本とするという提言だった。ただし、実用性を考慮すると、将来的には巡行用と宵山飾り用の 2 種類があっても、という含みを持たせる。

吉田理事長　船鉾さんは今どうなっているか。

船鉾　神功皇后の衣装は、巡行の時はいくさの衣装。宵山の時は普通の衣装。そういう意味で分けている。囃子方が一杯だから、という理由ではない。他の 3 体の衣装はそのまま。

植木委員長　能装束そのままでは収まり切らないかと思うので、細かい点については林委員の主導でやっていただき、監修の段階で皆さんの調整をいただくということにしたい。次に、肝心の人形本体をどうするか。

林委員　人形の髪が黒垂れ、白垂れ、赤熊で、顔の周りが隠れるので、面を付けるのに都合がよい（まるまる見えるなら面を付けるというのは違和感があるし、顔をある程度きちんと作るのであれば、面は必要がない）。能面のそれぞれの性格に近い創作面を作り、顔部分に当てるという方法がよいと思う。例えば、住吉明神は「尉（じょう）」のような面、鹿島は壮年の「平太」「邯鄲男（かんたんおとこ）」のような面、磯良は「龍神」「大飛出（おおとびで）」「べし見」といった中から面を創作する。

植木委員長　神功皇后のご神体本体が残っているから、それに合わせてということか。基本的に本体は木彫にする。見えない顔の部分でもそれなりに作るか。ただし仮面をつける前提ならば、本体は手を掛けずともよいのではという意見だが、保存会の意見が重要になってくる。

林委員　例えば今でも浄妙山は下の顔はなくて木に括ってある。

京都市　想定図で顔を描く時には、能面を参考にする（磯良だけは該当するものはなく難しいので要相談）が、実際に作るときは実施設計を作成するので、後々は検討いただかなければならない。

四条町　一つお聞きしたい。山鉾のご神体（42 体、うち仏像 4 体、男性 33 体、女性 5 体）で面をかけているのは、うちの神功皇后と船鉾・占出山の神功皇后、鈴鹿山の瀬織津姫の女性 4 体（女性 5 体のうち）と、男性は浄妙山の筒井浄妙だけである。男性はほとんど面を付けていない（船鉾山の神功皇后以外の 3 体を含め）。そこになにかしらの意味があるのであれば、大船鉾もそれに倣わなくてよいのか。

林委員

林委員　神格化された女性の顔は創作では難しいため、由緒のある能面をかけることで神聖化させ、神体として仰ぐという意味だろう。

植木委員長　歴史的には仮面の使い方からきている。本来、山は毎年趣向を変えていたのだが、それがだんだん固定化し一定の場景を表現するという方向に流れた。

林委員　きちんとした頭を作るのにこしたことはないが、先ほどの龍頭と同様、町内も満足し、神体として仰ぎ、将来に引き継いでいけるものがこの 3、4 年のうちにできるだろうかという現実的な心配があるので、とりあえず能面的なものを付けるのが一番よい方向ではないかと思う。ただし、神体人形についての協議は今日が初めてなので、安易に決められるものではないだろう。今日の議論は、想定図のイラストをどう描くかという話に限定したほうがよい。

植木委員長　イラストを描くに当たっては能面を参考にさせていただくということでよいだろう。それでは仮面を当てる方式を採るのか、丸彫りの頭でするのかの選択は後日の議論にするということでよろしいか。

吉田理事長　町内で考えておられるのは、2年後の2月に出鉾を決定するということ。今日も木彫、金具などいろいろな検討があったが、要するに2年後、大船鉾が路上に姿を現した時の体裁が問題なのだ。その時、神功皇后がおられれば急場はしのげるだろうが、やはり4体のご神体が揃わなければ大船鉾にならない。金物や木彫でも後回しにできることはできるだけ後回しにして、大船鉾そのものの意味を語る人形にこそ、力を集中すべきではないか。来年度はたまたま690万円の予算枠があるが、それで何ができるかということを考えないといけない。染織品の足りないところを補いたいといった希望はあるが、水引は補修しなければ使えないし、極めて現実的な問題がたくさんある。

林委員　私的な考えを言えば、とりあえず神功皇后だけで巡行を始められるのが一番自然ではないか。もしそうならば、狩衣は新調されたので、あとは天冠の修理と腰帯、下の着物は白ければ何でもよく、下の袴は今穿いておられる赤い袴で、それでもうOKだ。限られた予算の中でいろいろなことをしなければならないなら、巡行に必要な懸装品に回されたほうがよいだろう。

吉田理事長　そのあたりは決断だ。690万円という予算枠で、神功皇后にまつわる付属品はどの程度できるのか。

林委員　最低限必要なのは、天冠の修理と扇だ。その次の段階として、袴ぐらいはなんとかなれば嬉しい。

吉田理事長　残りで水引の足りないところができれば理想的だ。

植木委員長　見通しがついた来年度予算の中で、何を優先的に処理していくかという現実的な話になる。人形については最終的に4体だが、巡行計画を優先すれば、人形のうち神功皇后だけは最低限完成形に整えないと先に進まない。それは確認事項でよろしいか。基本的な方針だけはここで協議していただき、今の意向を受けて保存会は、2年後復活に向けてどこまでやれるか、それに対して何から優先的に費用を配分して形態を整えていくか等を考えて、この検討委員会の意見を踏まえ、スケジュールとプランを詰めていただきたいがよろしいか。ところで、2年後の復原想定図と、もう少し先の完全復原図がいるのだろうか。

京都市　この事業でやるのは今現在想定できる復原図。完全な復原図がいるのであれば、次の段階だろう。

⑥今後のスケジュールと報告書に関して

植木委員長　かなり突っ込んでいただいて細かい部分も見えてきたと思うが、最後に今後のスケジュールと報告書の作成について市から説明してもらう。

京都市　報告書を刊行するため、本年度下半期のスケジュールとして、11月末に目次案を提出させていただき、12月初旬に原稿依頼をし、3月上旬に原稿締切、3月下旬に第8回復原検討委員会を開催させていただく。各原稿を統合したものを用意するので、承認をいただきたい。それと同時並行で復原想定図を描く。報告書は300部作成し、関係各位に配布する予定。報告書の目次素案（叩き台）を資料に示した。山鉾連合会理事長からの「挨拶」、検討委員会委員長の「はじめに」があり、本委員会はヨドバシカメラの展示から始まっているので、それを含めての「委員会前史」「検討委員会等の経緯」、また委員会とはあまり関係しないが、大船鉾の歴史を簡単にまとめたものを付ける。それ以後は先生方に原稿をお願いしたい。大船鉾の形状の変遷、遺品類の調査報告、復原案であり、ページ数は概数。それから資料集、議事録を市でまとめ、四条町保存会に「保存会の歩み」（復原に至る経過を含め）と「むすびに」を書いていただき、木部設計図と復原想定図の図面を入れると、だいたい100ページ前後となる。

植木委員長　一応このような骨子でお願いする。執筆の段階でもう少しほしい、あるいは減らしたいとか、原稿内容について何かあれば事務局と調整していただきたい。

吉田理事長　今日は、本委員会とは別に、後祭りをどうするかという重要な検討会があった。17日の山鉾巡行が今は国の重要無形民俗文化財に指定されているが、指定文化財の条件を「17日神幸祭、24日還幸祭に伴う山鉾風流の巡行」に変更してもらうよう努力する、ということを申し合わせた。手続きとしては今後、府市の教育委員会を通じて文化庁に詳細説明をしなければならない。文化庁からは年度末に諾否の結論が出る。その検討会は12月頃から始められるようだ。これが山鉾連合会の今年度下半期の取り組みだ。

植木委員長　大船鉾についても今後は、さらに細かい点が課題として出てくるだろうが、よりよい方向に進むことを願っている。

四条町　今日の議論を経て、2年後の鉾での巡行を目指してますます準備を加速させていきたいと思う。　（以上）

第8回大船鉾復原検討委員会議事録

開催日時：平成25年3月21日（木）午後1時15分〜3時
会　　場：旧明倫幼稚園遊戯室（京都市中京区山伏山町）
出 席 者：植木行宣委員長、小嵜善通委員、久保智康委員、末川協委員、林駒夫委員、藤井健三委員、三上皓三委員、水野耕嗣委員　（以上委員、五十音順に記載、敬称略）

京都文化博物館祇園祭展示担当者
京都府教育庁指導部文化財保護課
京都府商工労働観光部染織・工芸課
京都市文化市民局文化観光都市推進室文化財保護課
（以上オブザーバー）
公益財団法人祇園祭船鉾保存会　（傍聴）
財団法人祇園祭山鉾連合会
公益財団法人四条町大船鉾保存会　（以上事務局）

《議　事　録》

植木委員長　いよいよこの委員会も最終段階に来た。まずこれまでの報告をお願いする。

①報告書タイトルについて検討

京都市　先生方にお集まりいただく委員会は今日が最後になるので、今日の議事として2点を検討していただきたい。1つは報告書タイトルについて。

植木委員長　現在は『大船鉾復原の歩み ――基本設計図完成に至るまで』となっているが、背文字にはこの文言だけが入るようになるのか。「祇園祭」という文言が先にくるほうが分かりやすい。我々は分かっているが、一般の人には分かりにくい。「至るまで」というのは凡例で述べるほうがよい。

京都市　『京都祇園祭』としなくてよいか。

吉田理事長　京都はいらない。地方の祇園祭は地名を入れるが、京都は祇園祭だけでよい。

四条町　祇園祭と付くだけでインターネットの検索ができる。

植木委員長　『祇園祭・大船鉾復原』あるいは「至るまで」を「向けて」にする。凡例やサブタイトルはいかがか。

京都市　目次凡例のところに入れるということですね。委員会の本来の趣旨が基本設計なので、「基本設計」の文言を入れたい。凡例にでも結構だ。

久保委員

久保委員　この冊子を読む主たる層は誰か。もし行政的に基本設計という意味合いがあるのならば書かなければならないし、そうでないのであれば外せばよい。「・」はない方があっさりしてきれいだと思う。

植木委員長　市は今の指摘について何かあるか。

京都市　植木委員長からあったとおり、これは全国山・鉾・屋台保存連合会の会員に、つまり一冊ずつお渡しするのが目的。300冊しか刷らないので、全国の行政関係者と山・鉾・屋台の関係者に配布して、事務局には30部残したい。そして、PDFでダウンロードできるようにしたい。

植木委員長　一般向けでないのであれば、はっきりサブタイトルを入れる。

水野委員　復原しようとする町が参考にするということであれば300部は少ない。原図の添付は無理としても、アピール力が弱い。

京都市　予算の限度があるので300部となった。

植木委員長　PDFで公開するのであれば、欲しい人はそれで見られるわけだから、理屈は通る。一応300部で。ではサブタイトルは「基本設計図の完成に至るまで」

久保委員　行政的補助金を得て、きちんと学術的な検討をした内容であれば、一般的な「歩み」や「至るまで」で終わらせているより、報告書として提示すべきだ。そうでないと本の性格が間違って伝えられてしまう。

植木委員長　「基本設計図完成報告書」とあっさりさせるか。

吉田理事長　それでいいのではないか。それで、300部にこだわらずにもう少しあったほうがいいと思う。たいして予算はかからないだろう。

植木委員長　300部作ろうと、500部作ろうとあまり変わらないと思う。

水野委員　紙代だけだから、ちょっと余計に印刷しておいたほうがパンフレットとして使える。

吉田理事長　予算の使い方はテクニカルな部分があるので、任せたらどうか。

植木委員長　それでは、少し多めに作っておきたいという要望があったことを事務局に念押ししておく。報告書タイトルは、『祇園祭大船鉾復原の歩み ――基本設計図完成報告書』ということにする。

③復原想定図の作成について報告

植木委員長　次に、復原想定図の作成について、事務局から報告をお願いする。

京都市　この2年間、基本設計作成のための委員会という目的で開催されたが、現実には特に木部をヨドバシカメラに展示するという目的があり、基本設計しつつ、実施設計どころか実際に作っている状態だった。部分的に工事が先行しているところに加え、前回委員会で復原想定図を描くことになったが、それに当たっては中途半端なコンセプトでは描けないため、ほぼ完成形の想定図を描かざるを得ない。委員会で検討していない細かい部分についてもはっきりさせる必要が生じてきた。今日は先生方のご意見をお聞きし、結論は出ないかもしれないが、詳細を詰めさせていただきたい。前回も紹介したが、祇園祭の山と鉾の構造を、特定非営利活動法人京町家再生研究会で5～6年調査していただいている。その成果の一部をお手元に配布してある（祇園祭山鉾構造解説書）。この解説書でイラストを描いた中川さんに、大船鉾の復原想定図もお願いしている。検討していただきたい事項を、配布資料「検討内容」として掲げた。

材質により（例えば松材とケヤキ）イラストに描いたときの質感は異なってくるが、木部や屋根をどうするか。あるいは塗りの色調をどうするか。欄縁の錺金具の文様と取り付け位置をどうするか。棟飾りの形状をどうするか。木彫デザインは水野先生から詳細な指示が出ているが、そのまま貼り付けてよいかどうか。四本柱・欄縁・高欄の塗りの色調、ご神体人形の容姿、旗と幟の形状、房の色調、艫部・屋形前拝部・後欄下部の幕の形状と色・紋、すそ幕の色・デザイン、といった細かい部分は、基本設計段階では検討する必要もなかったが、想定図を描くとなると関わってくる。想定図は四条町さんが寄付を集めるときにも素材になるものだから、今ご意見を賜りたい。

吉田理事長　デザインのあるものは細かく描き起こせばよいが、材質を、松として描くとかケヤキとして描く、そんなおかしなことを言っていてはいけない。今は菊水鉾の古材（松）でやっているが、途中で他の材に変更するかもしれない。設計図の部材に関する問題は、白描でよいのではないか。

植木委員長　今後の変更可能性についても視野に入れたほうがよいというご意見である。すると決めなければならないのは、基本的に、本体と屋形周りの形状。また、布の装飾となる。ご神体人形は見える範囲で描くということになろうが、想定図だから外観で見える部分はきちんと書いておく必要があるだろう。一方、錺金具まで細かく描くか、木彫をどこまで描くか、これは本体ができあがったとき以降に持ち越した方がいいのか、という議論が必要になる。もし、金具まで描くとなると、先生方のご意見を経て（先生方からご意見を出していただいてもすぐに GO というわけにはいかないから）議論を細かく重ねてとなると、今回では詰めることができないだろう。ではどうすればいいか。

水野委員　お聞きしたいのだが、描く想定図は一枚か。透視図（パース）なのか。真横から見た立面図的なものなのか。それによってずいぶん違う。例えば彩色した透視図で、写真的な復原図で見やすくするのであれば、私の印象では、幕がついて装飾されると木部の色目まではほとんど見えないのではないか。

中川　その通りだ。後方から見た図になるか、前方から見た図になるかは今後の検討になるかと思うが。木目というより色味か。

水野委員　白木ではなく塗ってあると思うのだが。

植木委員長　構造については基本設計に書かれているから、外観四面を描く程度ということではないのか。見た目はこういうイメージで上がる、という程度の図ということだろう。まず、それを確認しておかなければならない。その上で、外観上どうしても基本になるところだけはきちんと詰めておく必要がある。（幕の形状などはこれに入る。）

久保委員　この報告書は、町内の方々の総意を反映したものではない。あくまで試案だ。だから基本設計なのだし、現状でそこまでシビアな絵を描くというほうが無茶だろう。

京都市　おっしゃる通りである。しかし後々の寄付集めにも都合がいい、という長所がある。すると、何を基準にイラストを描けばよいか。

植木委員長　とりあえず基本的にはここまで完成させる、という段階のイラストに留めるか。加飾部分は可変性が高い（金具をどこに付けるか、木彫をどうするかというのは非常に具体的なものだ）から、なまじそれを描いてしまうと逆に縛りになる。一方、欄縁をどうするかについては構造に関わってくるから、変わってはいけないわけだ。

久保委員　私が提出した原稿には、この絵に基づいてこういう形の金具を、ということを書いた。それを凡例で引用して、基本設計の報告書の内容に基づいたらだと明記すればよい。その他は町の方がどう使われようが全く問題はない。

植木委員長　報告書の内容は専門的見地から検討していただいた最も妥当なご意見だが、むしろ加飾部分については本体が完全に完成して以後、段階的に出てくる問題ではないか。金具も木彫も最初からすべてを一度に付けられるとは限らない。

京都市　それならば、先生方の原稿を反映した上で、資料性の高い楳嶺図と個人蔵図を参考にイメージイラストを起こして、先生方に個別に示させていただくということでよいか。

植木委員長　イメージ図として、特に外観の基本形をきちんと描くのが第一。棟飾りの形状などは基本設計で出ているが、木部の質感、屋根の質感、塗りの色調などは可変性のあるものだからイメージとして描く。一方、旗、幟は不可欠な部品なわけだが、これはどうするか。つまり、ここまで協議をしてきて、ツメのところで町内任せということになったら、どうチェックがかけられるのかという問題になる。可変的な部分については必要に応じて部分ごとに議論し、基本設計図、基本構想に基づいて、ベストな形で実現するような方法を担保しておきたい。その段取りが出来てさえいれば、今は基本設計図と外観の想定図ぐらいでいい。あとは、具体的に金具をどうするか、といった時に、委員会の趣旨を引き継いだチェック機能が働くように願いたい。

吉田理事長　委員会はどこまで継続するのか。報告書が出た段階で一旦ピリオドを打つ。あとは専門委員会と審議会があるから、手続き的にはそういうところで報告していただき、協議していけばいい。

植木委員長　具体的には専門委員会で議論して、できれば監修を立てて、ということになるか。

吉田理事長　町内が好きなようにやればいいということではない。他の 32 ヶ町と同じだから、好きなようにというわけにはいかない。報告していただいて了承できるものであれば了承し、訂正すべきものがあれば訂正を加える。そういうことではないか。

植木委員長　今後は基本設計を踏まえて、詳細な事業化に当たっては審議会の組織を使って検討していくということ。少なくとも審議会の了解を得なければ進められない。

吉田理事長　それは他の 32 ヶ町も同じで、何をするにしても、専門委員の先生方の目を通していただくということになっている。

植木委員長　委員の先生方には、出来た想定図に目を通していただくという段取りだけはしておきたい。委員会は持てるか。

吉田理事長　想定図といってもあまり細かいものをされると返って困る。例えばこの「祇園祭山鉾構造報告書」ではどこの鉾のこと

を描いているのかわからない。うちの町内は荒縄を巻き付けて入れるということをしない。ここはたまたまやっている。そういうところはもう少し大雑把でないといけない。32ヶ町ではいろいろ違う部分がある。

植木委員長　せっかくの機会だから、そういうことについても後ほど意見をいただくとして、結局は完成図に近いものをイメージしながら、しかしまだ可変性を残しておくという、イメージ図として描く以外に方法がない。

小嵜委員　図面はどのぐらいの大きさを想定しているのか。

京都市　A2版。

吉田理事長　その大きさじゃごまかしがきかない。

水野委員　その大きさならばディテールを詰めないと描けない。A4版ならば、あくまで想定図、といって逃げられるが。

京都市　事務局ではそう想定していたが、A2が大きいならもっと小さくしてもよい。

藤井委員　A2は大きすぎる。描くほうが困る。せいぜい見開き2頁だろう。

植木委員長　今の議を踏まえて、イメージ図を詰めてもらい、先生方には郵送でも持ち回りでもいいから目を通していただく。いずれにせよ、装飾部分を省いた外観を描く。四面か。

京都市　検討課題2-2が「作図の方向」なのだが、そこで決めていただこうという予定だった。詳細な立面図を四枚描くわけじゃなくて、パースを一枚と。これは基本設計図でなく、あくまでも別物。寄付集めをするためのツールだ。

植木委員長　ただし、報告書が発行された、こういう方向で、こういう検討がなされた、と言ってもニュースに載るのは大抵こういう図面だから、かなり重要だ。一枚となるとどういう角度でどちらから描けばいいのか、ご意見をいただきたい。

末川委員

末川委員　情報量の多いのは後ろのやや上からだが、逆にごまかしたいと言うのであれば、前方から見上げる形にすれば。

植木委員長　左前方、右前方からみるという形になるか。

水野委員　今回の復原は、龍をやめて大金幣だとあまり見栄えがしない。すると、後ろからのほうが綺麗になるかもしれない。

中川　どちらを重点に、という指示をいただければありがたい。

植木委員長　ご神体が重要な意味を持つため、今神功皇后だけだが、他の人形を外すということはできない。人形については決めておかねばならない。人形が載る山であると見せるには横からがよいのではないか。神功皇后さんは屋形の中でしょう。後ろから描くとせっかくの神功皇后さんがみえないので具合が悪い。

京都市　個人蔵図ぐらいの角度か。

植木委員長　一枚だけとなるとそんなところでどうだろうか。何をポイントに描くかということだ。

京都市　言わずもがなだが、囃子方は入れなくていいか。

植木委員長　いれないいれない。神功皇后が見えなくなってしまう。

水野委員　今の意見をまとめると、後ろからは見栄えはよいが人形が見えない。やはり前からしかダメだ。あまり前だと後ろが見えないので、斜め前方から見たぐらいが一番よいのではないか。

植木委員長　最終的にはそういうところで落ち着くのではないかと思うが、このあたりはプロの感覚を生かして案を事務局へ提示していただき、事務局のチェックを経て図面化していただいて、委員のところにはこういうふうになりますと示していただき、結果的に承認をいただく。ということを段取りしてほしい。

京都市　了解した。

四条町　ただし、神功皇后のご神体は見せない、という決まりが町にあるのだが。

植木委員長　特別な何かがあるのか。

四条町　伝統的に決まっている。今年ご神体衣装を新調して、それを披露する時に、御簾で顔を隠そうということになった。

植木委員長　むき出しでは見せないということでしょう。住吉明神などにそれはないんですか。御簾で隠すのは神功皇后だけか。

四条町　ほかの人形にそれはない。

植木委員長　御簾をかけてこうなる、というのも大事な外観だから、それならばそう描く必要がある。

四条町　宵山飾りはそうしたが、鉾に乗せる時も御簾で隠す可能性がある。まだそこまで決めていないが。

吉田理事長　ちょっと待って。宵山飾りはいいのだ。船鉾ではどうしているのか。

船鉾保存会　17日はご神体には写し面をつける。ご神面は箱に入れて、町の者が持って鉾に乗る。

吉田理事長　写し面といえどもご神体だ。その前に御簾を掛けたりはしないか。

船鉾保存会　しない。

植木委員長　宵山の段階で、山に乗せるのか。当日の朝に乗せるよね。そうすると、会所飾りの時に御簾を掛けるのは自然の話。

吉田理事長　会所飾りの時に御簾を掛けるのは、かえって特色が出ていい。しかし巡行当日はなしでいいと思う。

植木委員長　今まで出てこなかった話だから、決めておかなければならない。この検討委員会でそういう話が出たということを伝えて、町内で意見の統一を図っておいていただきたい。

四条町　了解した。

植木委員長　そして、連合会に報告を上げて、指導を仰いでいただけるか。それを受けてイメージ図を描くということになる。

④四条町から現状報告

四条町　3月1日に記者発表したとおり、京都ライオンズクラブ様より創立60周年記念事業として大船鉾復興事業に対し屋形・艫屋形・跳ね出し高欄を寄贈いただくことが決まった。装飾の最低限の木部ではあるが、一気に本体がすべて完成することとなった。3月20日現在、竹田工務店において工事をスタートさせた。微調整の部分を除き、年内完成をめざしている。技術的なことで言えば、大枠として、唐破風、千鳥破風、船飾り、艫屋形の台場の上下二段のあたりが決まれば、現実的には設計図通りに進められる。

末川委員　今日は三上委員が欠席されたが、現場の製作に対して、委員会でどれだけフォローしていただけるのだろうか。私どもは現場の監理に入っているが、現場では原寸で立ち上げようとしている。例えば、軸組は設計図通りでほぼ間違いなく出来るが、曲線の部分など調整を必要とするところは製作時にどうすればよいか。たまたま竹田工務店で板数を起こしていたので、棟木（むねき）と桁（けた）が決まっている状態での唐破風のベストはどんな風になるかを原寸で書いてくれたが、こういうことが一通り揃った段階で、もし間が許せば先生に見ていただきたい。もし現場でということならば、それでベストを尽くすしかない。

植木委員長　着々と進行中ということだ。何かご質問、ご意見があればどうぞ。

水野委員　私には唐破風のカーブが少しきついのではないかという気がするのだが。模型でチェックしたほうがよいのではないか。

末川委員　模型を作っていないので、現場では原寸大で確認するしかない。ご足労いただけないだろうか。

植木委員長　先生方に、現場を検分していただきたいという要望が出ているが、事務局はそういう対応は可能か。

吉田理事長　構造については三上委員に見てもらえばよいと思う。

植木委員長　それでは、着工に当たっては非常に微妙なことも出てくるが、専門の三上委員には現場で検分していただく。検討委員会の役割の一環としてやっていただく。よろしいか。事務局にはその段取りをお願いする。

⑤その他の報告

四条町　三若神輿会様より音頭取の力綱を寄贈いただくことになり、黒色の力綱を発注した。大船鉾に残る房が黒色のものが多いことと、個人蔵図に黒色に見える力綱がわずかに見えることから決定した。次に、前回承認いただいた黒主山保存会による欄縁製作については順調に進んでおり、6月9日にヨドバシ文化遺産展示室にて装着する予定である。当日付けるだけにするか、付けっぱなしにするかは未定。

植木委員長　今後は基本設計にいかに忠実に進めていくかが重要である。補助金がどこから出るかという報告も必要だが、経緯・結果だけでなく、せっかくここまで議論を積み上げてきたのだから、新しい取り組みについてはその都度連合会に報告を上げていただきたい。施工段階でどんどん変わってくるのが一番怖いことだ。

四条町　今後の予定だが、現存している懸装品について、使えるものは使いたいと思うため、一番水引と二番水引、艫水引、天水引については現存のものを仕立て直したいと思っている。ただし、京都市の有形民俗文化財に指定されているため、現存品に戻せるようにしなければならない。京都市からは触るな、と言われるが、どのように判断すればよいか。

植木委員長　基本的には、京都市と連合会に話を通して、その指導を受けていただきたい。業者任せはだめだ。懸装品については、連合会で委員をお願いしている藤井先生に監修を受けなければならないと思う。こういったことは以後すべてそうだが、手続きは踏んで戴こう。

吉田理事長　使えるものは極力お使いになればいい。今、元に戻れるように仕立て直す、と言われたが、それは居祭用に戻すということか。居祭に使う懸装品にカーブをつけて仕立て直すということか。今後居祭はないわけだから、戻す必要はないだろう。

四条町　普段は別のものを付けようとしている。

吉田理事長　使えるものはできるだけ使うべきだ。あと50年、100年先には状況が変わるかもしれないが、今は、これまで大事にしてこられたものを、今復原する鉾に使えるようにすることが重要。不可能なのか。

四条町　切れてしまっている部分があるので、元にどれだけ近づけられるかということもあるし、また有形指定を受けている品でもあるし、検討して一番いい形のものができるのか、という問題もある。

吉田理事長　検討には時間がかかる。

四条町　幕と本体と金具が別々に話し合いをしていると回数がかかる。

吉田理事長　ならば、これまで染織品は藤井先生が関わってこられたのだから、藤井先生と相談しながら仕事を進められてはいかがだろう。居祭の現場に戻せるような、という配慮は必要ない。

植木委員長　市は、有形指定の問題で現状変更は困る、という立場なのか。

吉田理事長　解除すればいい。

京都市　今後この委員会は閉じることになるが、専門委員会、審議会の場で監修という形で進めていくことになる。それが本筋だとは思うが、指定文化財の仕立て直しという制約もあり、寸法がどうも違う、どうすればいいかを現場は心配されているので、復興鉾であるということもあり、特別なシステムを作れないだろうか。

吉田理事長　それは市の知恵だろう。

京都市　国に対しては基本設計として成果物を出さなければならない。そういう重いものでなくて、実施設計は町の主導でやればいいと思うが、審議会は年に3回しかない。

吉田理事長　その間の繋ぎは、藤井先生が目配りしてくださったらいい。

京都市　資金などはどうするか。資金調達は町に任せるということでいいのかと心配する。

植木委員長　資金の集まり具合により、どの程度で具体化していくかは難しい問題になる。金額に合わせるしかないが、これでいいのかという問題がかかってくる。そのためには審議会として、基本設計に基づいて格を壊さないよう、レベルの維持を図っていただく。

それを専門委員会の委員としてお願いするということだろう。指定文化財の指定については市のほうでクリアしなければならない。現状変更ではあるが指定に変更はない、という方向でいくとか。

吉田理事長

吉田理事長　最初、有形指定の時に、大船鉾に使えるものだと思われていた。そこが違っている点なのだ。実際は居祭用に仕立て直してあったものであるために使えないということが分かってきた。それでどうしようかとなった。藤井先生は藤井先生なりに、常の水引からアールの付いたものを想定しておられる。が、残っているものと比べると曲線がうまくいかない。現実には先生と相談しながらやっていただきたい。舵のような固定的なものは使える。前掛けも比較的使える。

四条町　それが、前掛けと後掛けこそが一番危ない。一度巡行に使うと、糸が弱っているので破損するかもということなので、前掛けを復原したいという希望を、連合会には一応伝えている。

植木委員長　もし使うとすれば、強い修理をして使うしかないということだ。残されたものを使い切るという判断になる。いや、そうでなく、受け継いだ資料としてこれはこれで保存したいということになると対応の仕方が違ってくる。そうなると、その都度の監修でなく、特に幕については、現在残っているものをどう使い回すか、全体的な計画を立てないといけない。藤井先生には、出てきた問題を審議するのでなく、前の段階から関わっていただくことが重要になる。連合会にお願いしたいのは、専門委員として先生方に動いていただく際に、仕様書の中身にまで踏み込んだ動きになるという点の了解だ。他の委員会とは違う。経費の伴う話になるかもしれないのでご注意を。有形指定に関しては、懸装品は使うための装飾であり、復活させるということは本来の形に戻るわけだから、有形指定を外すほうが筋は通ると思う。有形指定の現状変更はかなり難しいから、そうしたほうが今後は楽だろう。

京都市　現状復帰できるように手を入れる、という方法を考えてみるつもりである。

吉田理事長　艫水引の鳳凰の部分も全部寸足らずなのか。残念だ。

植木委員長　何を最優先するかによるが、懸装品は額縁の仕様で形状を整えるのが一番簡単だ。現品の形状をできるだけ触らないということを押さえた上で、できることを検討する。行き当たりばったりで決めることだけは避けたい。今後の進め方については、部分部分の積み上げでなく、全体計画をまず考えていただく。当委員会の趣旨を引き継ぐため、連合会の審議会の仕組みを使い、先生方の事前の指導を得ながら詰めていただきたい。連合会に責任を負っていただくということになってしまうが、よろしくお願いしたい。

⑥補助事業報告

植木委員長　最後に、町が京都府所管の新しい補助事業にのせようと考えている補助事業について説明をお願いする。

四条町　胴幕の新調と、二番水引の前方、ご神体人形の腰帯を考えている。

吉田理事長　この委員会は今日で終わるが、金物や染織品など様々な未決の分がある。こういった全体会議ではないが、この流れで個々の専門の先生方にきっちり相談していきたい。審議会の回数では議論が足らない場合があるから、充分に時間調整をしていただき、意見を頂戴することが大事だ。

四条町　その設定はどこがするのか。やはり連合会が主導で、検討の場を設けていただきたい。新調するにしても、塗りと織りと金具のバランスを図るためには、同時に議論して同時並行で進める必要がある。

吉田理事長　そのとおりだ。それが審議会の場であったり、審議会が数ヶ月先であれば、個々に会合を持たなければならない。

植木委員長　専門調査会には早い段階から動いていただきたい。市も、連合会と相談しながら異論のないように進めていただきたい。折角の議論が無駄にならないように、趣旨を生かして、連合会の支援を受けながら実現に向けて進むことを祈念する。

四条町　植木先生をはじめ先生方には多大なご協力をいただき、大船鉾復原が実現に向かってきた。来年は焼失 150 年（1864 年 7 月 19 日（旧暦）に蛤御門の変。2014 年に復活すれば、149 年の空白を経て、150 年目の復活）という節目の年を迎えるため、なんとかして大船鉾の姿をみなさんに披露したいと思う。復原が進み、巡行ができるようになっても完成までにはまだまだ年月がかかると思う。今後ともみなさまのご指導、ご教授をどうぞよろしくお願いしたい。ありがとうございました。　（以上）

※議事録筆耕協力：株式会社シィー・ディー・アイ